

聾君は源家の類葉 蝶花形名歌島臺
嫁君は平家の落人

序 詞

婚禮は禮の本なり、二性の好を合せ、上を以て宗廟に事へ、下を以て後世を繼ぐ、敬愼重正の教へ宜なるかな。男女別有り夫婦有る、かためは雌雄の蝶花形、相生祝ふ島臺や、變らぬ例久方の、天津御位一百八代、御陽成院の知ろし召す、御代こそ殊に豐なる。時維れ天正十四年五月下旬、宣命の旨を傳へ、紫宸殿に伺公の公卿は、前の中納言經行朝臣、右大辨兼忠公、左右に笏取り坐し給へば、階下には當時武家の棟梁、眞柴大領の臣、加藤虎之助正清、つゞいて周防の國主大内島の冠者が臣、出海左衛門宗貞、其外百司百僚衛固の士、威儀を守つて並びある。經行卿仰せ出さるとは、「今天下漸くに治り、太平を樂しむ御代なるに、眞柴久吉大内義廣、互に威勢を諍うて、合戦を企つる由、叡聞に達し、宸襟更に穩ならず、これによつて眞柴が重寶、日月の旗、大内に傳はる勘合の印、互に取替へ兩家共、以來は疎意なき心を示し、和議を調へ、朝廷を永く守護致せよとある勅命なり」と述べらるゝ。正清謹しんで、「コハ有難き御勅詔、民

の歎きを思し召され、無事を計らふ御仁徳、出海が所存は存ぜず、此正清においては主人久吉に申すまでもなく、和睦の儀委細畏り奉る」と、申上ぐれば出海左衛門、「仰を背き寶をば、渡さぬと申せば違勅の科、其方とても得心の上は、此方に別心あらんや、同じく承知仕る」と頭を下ぐれば、右大辨嘲笑ひ、「ハ、ハ、ハ、其方どもが妻は、小坂部兵部が姉妹の娘、互に縁者の中とて早却の勅答、云合せが見えすいて、此右大辨は吞込まぬ。和睦を計るは寶の取替、質物は知らぬ事、誠の寶は眞柴家には無い筈の事」「コハ兼忠卿の詞とも覺えず、先代より傳はる日月の御旗、眞柴の家に無いなどとは、何を證據に、何を以て」「ヤア知るまいと思ふか、春永亡失せし跡、柴田が所持せし日月の御旗、比良が嶽の落城より、勝家が後家小谷、春忠が悴三法師、春姫共に行くへ知れず、必定其手へ渡りし旗、どうして有らう筈がない」と、傍若無人に云ひほぐせば、經行卿座を進み、「寶の詮議は無益の沙汰、受取は大内が役目、此方には構はぬ事」と、詞の理詰に右大辨、口を閉ぢたる其所へ、豐後の守護職大友三郎、家來に目馴れぬ兵器を引かせ、庭上遙に手をつけば、右大辨詞をかけ、「いかに三郎、持參の兵器は何物」と尋ねれば、「それこそ大内の家にて、専ら用ゆる大筒と申す物、去年以來堺を論じて毎度の合戦、それに居る出海なども某に切立てられ、狼狽へ廻つて逃けしなに、此大筒を取落

せしを、久吉公へ獻上けんじやうの爲、はるく持参ぢさん仕る」と、顔真赤つらまつかいに嘘うその皮かは。右大辨かたはは片頬かたほに笑み、
「ハテ扱聞たがきしに違ふ大内が臆病おくびやう、いかに逃けるが好ぢやとて、此仰山このぎやうさんな大筒を、打捨うちすて置くと
は餘りの沙汰さた」と、嘲哂てうらうすれば左衛門聞ききかね、「大内の武勇に攻付せめつけられ、久吉公へ助力じよりよくを頼
む大腰拔おほこしおけ、それに何ぞ心兵器へいさを打捨うちすて、逃にけし杯なづとは奇怪千萬きうくわい、その大筒は引金ひきがね挫くじけ、再び用
に立たざる故、取更とりかへるも面倒めんどうと、退陣たいじんの節捨置せつすておきしを、拾ひろひ取つての手柄てがら顔、片はらいたし」
と嘲笑あざわらへば、「ヤア負けをしみの減へらず口、引金ひきがねは損そこねたか、但しは置いて逃にけたのか、改め
見めん」と立ちかゝれば、實出けに海が詞ことばの如く、引ひがね損そこねし大筒に、放はなした嘘うその當違あてちがひ、しよけ
り入いつてぞ控ひかへる。經行卿つねゆきやう笏しやく取直とりなおし、「兩家の重寶ちやうほう取りかゆるは、則ち大内の領國りやうこく宮島みやじまの
千疊敷せんでふじき、下向けかうの勅使さだめは絹笠きぬかさ三位、其旨心得そのむねにこころえ、左衛門も早く歸國きこく、正清も急いで出立しゆつたつ有るべし」
と、仰にはつと立上り、かの大筒を家來に引かせ、「此大筒は大内の兵器、他家に置きなば奪うばは
れしと、嘲あざける者や有りぬらん。此正清が下向けかうの砌みきり、是を土産みやひ」と穩おだやかに、納むる胸の智仁勇ちじんゆう、
出海大友兩人も、此場このばをたつか弓取ゆみどりの、心和こころやはらぐ大内山おほうちやま、風ものどけき三重。

貳 冊 目

輕業かるわざ見せ物もの力持ちからもち、芝居しばの太鼓打うち交まじせて、音おとはどん／＼どさくさと、押合おしあひへし合あふ宮島みやじまの、群ぐん集じふは實けにも人の市いち、暑あつさ彌いや増ますばかりなり。参まゐり下向げかうが立留たちどまり、「何なにと今年ことしの市いちはきつい賑にぎひでは無いないかい」「オ、其その筈はずの事、此宮島このみやじまを取とつてござる大内様おおのさまと久吉様ひさきちと、既すでに軍いくさに成なる所を、禁中様きんちゆうさまの挨拶あいさつで、何もかも丸まるう納なり、勅使様ちやくしさまが見みえる故ゆゑ、随分賑ずぶんぎかにせいと、殿様どのさまからのお觸ふれぢやはいの」「オ、夫そで讀よめた。そしてマア雛助ひなすけや新七しんしちも下くだつてゐるけな、次手ついでに一切見ひじやくようかい」「イヤ／＼おりや芝居しばより評判ひやうはんの、水豹すゐへうにせう」と巾著きんちやくの、底そこを探さがつて足早あしはやに、思おもひ／＼に走り行く。扱このころなりひも此頃鳴響ななりひびく、鐵砲組てつぱうぐみの男作おとこだて、先ききは頭かしらの種たねが島しま、つゞいて火蓋ひふた二つ玉たま、めつたに人を投頭巾なげづきん、下駄ひたも姿すがたも一樣いさふに、思おもひ合あうたる惡者わるもの作り、大道だいだうに突つつぱだかり、「コレ頭かしら、大友ちゆうとも殿どのに頼たのまれた勇次郎ゆうじらうや大隅おほすみに、逢あひたい物でござんすの」「オ、それ、此二つ玉たまも道々眼張みち／＼がんはつて居ゐれど、とんと現あらはれぬぞや」「サアよいて、どうで爰こゝへ出てくる二人ふたり、相人あひては高たかが町人ちやうにん、おれが爲なる程ほどの事も無い、うせたらわいら二人ふたりして」「オ、合點がてんでござんす、頭かしらは先へ」「そんならおれは千疊敷ちよぢきへ行く程ほどに、後あとからこい」と三人が、心こゝろは一つ二道ふたみちへ、引き別わかれてぞ歩あゆみ行く。闇やみの

夜の、梅にはあらで風薫る、位も松の洒落姿、名も大隅が住み馴れし、廓放れて氣も廣う、千疊敷への揚屋入、拔八文字の傘の内、さす手引く手に氣を付くる、遣手禿に打交る、客は大内へ出入の町人、岩國屋勇次郎、若殿育の浮かれ好、牽頭末社に誘はれ、來かゝる跡より二人の悪者、「コレ待つて下んせ、待つて貰は」と、のさばり出れば立止り、「オ、好かん侍と云はんしたは誰ぢやと思へば、火蓋様二つ玉様、何ぞ用かえ」「イヤ太夫主、こなんに用はない。用の有るは此勇次郎、外の事でもない、アノ大隅太夫がおいらが仲間へ貰ひたい」「オ、火蓋のいふ通り、さる人に頼まれた此せりふ、厭と言はんすりや腕盡。サア返事はどうかや」と、きめ付けられて勇次郎、「あの様にいうてぢやが、何と云うてよからうやら、なう太夫」「アイ大事でござんせぬ、譬へ勇次郎様がアイと言はんしても、わたしが否でござんす。お前方が男盡で頼まれたせりふなら、わたしも勤の意氣地、命に換へても否でござんすぞえ」「エ、忌々しい引裂かれめ、さう吐かしや一層やけ、われには構はぬ、相人は勇次郎、男づくで貰ふのぢや」と、二人は身構へ立掛る、後に始終立聞く侍、二人を取つて投付くれば、起き上つて頬燴め、「テモえらい目に大隅め、覺えて居れ」と迺歸る。太夫は思はず見合す顔、「ヤアお前は太夫様」「イヤサ何にも云ふまい。爰は途中、狼藉者の難儀を見かけ、救ひに出たは武士の情」「そんなら是まで

應へもせぬ、つれない私に恨も無う」「オ、サつれない仇を恩で返すは、色に迷はぬ身どもが潔白、邪魔の無い中、勇次郎とやらを連れ、千疊敷へ早く行けさ」「エ、嬉しうござんす。さう言ふお心とはつゆ知らず、日頃のお詫は又重ねて、あなたもちやつとお禮を」と、太夫が詞に勇次郎、「どなたかは存ぜねども、先程よりの御懇情、忝し」と手をつかゆれば、「何のく禮には及ばぬ。一刻も早うく」に、牽頭末社はいきり出し、「是からわつさり酒にして、此滅入を取戻さう。サアくお出」と先に立ち、滅多無性にそより立て、さどめき連れて行く跡へ、あたりを窺ひ以前の二人、差寄つて、「大友様、仰の通りに今の仕打」「オ、二人共大儀々々、斯う情を見せ置いて、大隅めを取入る魂膽、又其外に密事の評定、大藏も待ちをれば、千疊敷で申合さん」「然らば我等も御供」と、皆打つて歩み行く。當國下向の御勅使、絹笠三位光高卿、衛固の青侍前後を圍ひ、並松原にさしかゝれば、それと見るより木村和田藏、乗物間近く手をつかへ、「御勅使の御迎ひとして、加藤正清が家來木村和田藏、是まで參上仕る」と、申上ぐれば光高卿、御乗物を開かせ給ひ、「其方は正清が家來よな、出迎ひ大儀。此度勅命を以て眞柴大内が爭戰を止め、則ち今日千疊敷にて、互の寶を取りかはす約諾、正清も下向の砌、日月の御旗持參致せしで有らうな」「ハア」「然らば正清へ光高が土産をくれん」と乗物の、硯引寄せ短冊に、書認むる

一首の和歌、和田藏謹しんで押戴き、「しるしなき、音をも啼くかな鶯の、今年のみ散る花ならなくに。コリヤ是れ古今集躬恆が歌、古歌を以てしるしなき心をしらす賜は、ムウ、スリヤ大内家の寶は此歌の言葉の如く、しるしなく紛失せしとの御内意でござるかな」「ホ、ウ適明察、勘合の印は大内が家臣陶全姜反逆の砌より、紛失のよし慥に聞置く、其心を以て正清に、取計らうてよからんと傳へよ」「ハ、ア重々の御懇情、主人正清も豫々此儀合點行かずと存ぜし故、大内が館へ忍びを入置き候」と、申上ぐれば光高卿、「智勇を兼ねし正清が、抜目なき働、さこそ有るべし。委細は猶も面謁に」と、乗物立てさせ光高卿、千疊敷へ急がるれば、お暇願ひ和田藏は、旅館をさして立歸る。「オット爰らで此のきよが、私の形の前垂に、此爛鍋での繪口合、あかいの町の大銚子」「一回「コリヤ又しこいえらしこい」「次は差詰此の春野、此土蓋をば爰に置き、此取肴で思付、とさん何ぢやと薑で」「一回「コリヤ又しこいえらしこい。次は差詰太夫様、智慧貸そかく」「智慧借らぬく、わたしがそこらで代りましよ。此團扇をば爰に置き、又扇をば斯う捨てよ、福は團扇、扇は外はどうぢやいな」「一回「コリヤ又えらいえらしこい。さて此次は權八さん」「ヤアおれが、胸悪い、く」「エ、穢な、八百屋店ぢやないかえ」「イヤ斯うした所を繪面にて、ならすに似て、へどを吐くとはどうであろ」「コリヤ又悪いえら穢な。

扱此次は誰ぢやいな。智慧かそかく」「ア、コリヤく其様な愚癡合はよしにして、酒に爲
いく」と、又呑みかける勇次郎、「イヤモウ旦那の其の丈夫には、如何な權八も大避易、常の
酒でも有る事か、泡盛とは、聲でござります」「エ、埒のあかぬ奴、此酒はおいらが常ぢや。サ
ア注けく」と、差出す盃、太ア、コレ申し、其様に酔うても大事ないのかえ。けふは此千疊
敷を揚屋にして、殿様の御名代、出海様を饗す役目、それにまあ其様に」「ハテ太夫、大事な
はいなう。アノ左衛門様の堅藏に合うてゐたら勞瘵病、兎角浮世は色と酒。唄これな源太様、此
頃、聞けば軍が有るさうな、件の鎧はどう成さる、だんないく大事ない、鎧も兜もいらば
こそ、さをくくく竿竹ぢや」騒ぐ折しも次の間より、「勅使のお入」と警蹕の、聲聞ゆれ
ば權八は、見えをして、「お勅使様にはいざ先是へ」勇ヤイくあれは本まのお勅使ぢやはや
い」「エ、おりや又芝居事ぢやと思つて居ました。そんなら私らは何所ぞへ散りませうかいな」
勇「オ、それ、太夫を連れて奥の間へ、早うく」に大隅も、皆も一間へ立つて行く。跡こなた
より出海左衛門宗貞、禮服改め出迎へば、程なく入來る絹笠三位、衣冠の姿氣高くも、儲け
の御座に著き給へば、跡に目馴れぬ地下育、譯はしら齒の振袖娘、怖づく出でて畏る。左衛
門女に目を著けて、「見れば賤しきなり形、高貴の前とも憚らず、お次に控へし其女は、いか

なる者」と尋ねれば、「ホ、不審は尤、此女は都者なるが、嚴嶋詣の道にて連の女にはぐれし由、いふも分らぬ瘰癧病、見るに忍びず不便さに、歸洛の砌連歸り、親なる者に渡さんと、是まで召連れ來りし」と、仰に出海頭を下け、「ハ、アコハ有難き御仁心、感ずるに餘り有り。シテ大内家へ仰下さる勅詔の趣承りたし」と、演説すれば正笏有り、「抑眞柴大内は國家の柱石、虎狼の心を挾まば、民の憂少からず、是によつて兩家共、互に寶を取りかはし、和議を調へ禁庭を守護せよと有る帝の宣命、それに付き心得ぬは加藤正清、先達て紛失せし、日月の御旗を」「ア、イヤ何と御意なさる、スリヤ彌御旗は」「サア夙くに紛失。春永滅後、行方知れざる御旗をば、有ると云貫く眞柴主従、迂闊に寶は渡されまじ」「ハ、ア某も正清を、合點行かすと存ぜし故、寶の實否を探らん爲、とくより旅館へ忍びを以て」「ホウ拔目なき汝が働、遣は大内の執權、さこそく。寶取りかゆるは申の上刻、先づそれまでは奥殿にて、休息せん」と御立有れば、出海左衛門勇次郎に打向ひ、「光高卿の御目かけられし此女、御出館まで間も有れば、此浦の名所古跡、誘引有れ」と氣を付けて、勅使に引添ひしづくと、奥殿さして入りにける。跡には附はなまめきし、顔に見とれて勇次郎、思はず傍へ差寄つて、「瘰癧には惜しい品形、田舎に京も及びない、手入らずの初蕾、我等口切致したい。コレどうぢやく」と手を取

れど、身は口なしの色始、何のいらへも無いのが返事。「ム、そちら向くは否か、頭振るは應かいの。とんと分らぬ壬生狂言、獨修羅くら燃さうより、つい一筆」と傍なる、料紙取つて差出せば、恥し顔に散る紅葉、鹿の巻筆喰ひしめし、心の丈をかくとだに、繪に知れかしの判じ物、手に取上げて、「こりや何ぢや。羽根と手鞠に鬼の面を書いたのは、來年の事言や鬼が笑ふといふでも有るまい、エ、聞えたく。嬉しいけれど怖いといふ心ぢやの、ハテ初心な」と引寄せて、抱きしむればしめ返す、袖と袖との振合せ、これぞ他生の縁つたひ、出合頭に大隅が、それと見るより駈寄つて、「今に始めぬ悪性も、殿御は常といひもせう、物さへ言はれぬ瘧の身で、あた徒な。お前を爰に置くからぢや、サアござんせ」と手を取つて、行くを遣らじと隔つる娘、「邪魔さんすな」とやら腹立、悋氣嫉妬にひつしよ無う、振放されて思はずも、「ナウこれ待つて」と縋り付く、聲に驚き、「オ、笑止、物は言はぬの瘧ぢやのと、男を寐取る拵へ事」「イエくさうした事ぢやない。是には深い譯有れど、白地には言はれぬ時宜、大事の殿御に惚れたかと、嚙憎からう大隅殿。諸譯とやら手管とやら、しらぬ田舎の藪椿、松の位に及びない、戀路としれど姫ごぜの、切ない心思ひやり、たつた一度の逢瀬をば、赦して給べ」とかきくどく、娘心ぞわりなけれ。折から出づる娘ども、「お勅使様の召しますする、お娘御様マアあれ

へ、早うお出」に是非なくも、連れて入る跡式臺より、「加藤正清參上」と、知らせの聲に大隅は、小蔭へ恐ぶ間もなく、英名千里を走るが如き、虎之助正清、風切る肩衣故實を正し、優々と打通り、「それに居るは義廣の手廻りの者なるか」「イヤ私めはお出入の町人、岩國屋勇次郎と申す者でござります」ム、立入り致さば存じつらん、今日この千疊敷において、眞柴大内の寶を取りかへ、兩家和睦をなすべしとの勅命據なく、主君久吉の名代として、爰に來る加藤正清、武名に聞きおち出向はざる、臆病至極の冠者義廣、但しは大内が國風なるや、失禮なり」と不興の體、「アイヤ憚りながら加藤様のお詞とも存じませぬ。何ほ武勇烈しいあなた様でも、不知案内の敵の國、謀を以て討つ時は、いかな勇者も欺すに手なし。又寶と寶が雙方へ納らぬ其中はまだ敵々、下々で申せば喧嘩の相人、中直りない先は、式作法には及ぶまいかと存じます」ム、某に向ひ、左程の事いはんず者覺えない。ハテ町人には惜しい男、器量を見込み用事有り。ヤアく者ども、持參の兵器はや是へ」はつと答へて家來ども、えいや聲して昇き出づる、南蠻流の國崩し、目通りにさし置けば、「ナニ勇次郎とやら、大内が工夫の此大筒、數千の敵を打ちひしぐ火術の徳有るにもせよ、人力の及ばざる久吉公に敵せんとは、いつかな叶はぬ。有つて無用の軍器なれど、和睦のしるし我手土産、取次致してくれまいか」「加藤様の

御意と申し、お屋敷へ係つた御用」「しかと承知な。満足」と、件の大筒左右の手に、苦も無くぐつとさし上げて、磐石碎けと投付くるを、得たりと請けたる金剛力、さしもの正清横手を打ち、「重さ數斤の其大筒、色も變ぜず請留めし、稀代の勇力驚き入る」「イヤモ是がほんの怪我のはすみ、お目に留つて迷惑千萬。ドレ此様子御前へ」と、詞少に立つて行く。「ヤア大内島の冠者義廣先づ待たれよ」と呼びかくれば、「アイヤ私は生れの町人、思ひがけない名を云うて、へ、お弄りなされて下さりますな」「ホ、賤しき商人と姿を變ゆるも、危きに近寄らざる、君子の教を用ゆる名將」「イヤモいかやうに御意なされても、町人の岩國屋と申すに相違はござりませぬ」「ム、名を隠す事は易く、徳を隠す事は難し。ハテ町人よな」「ハイ、是を御縁にお出入を」「申付くる折も有らう」「御縁もござらば重ねて對面。おさらば」「さらば」と詞數、云はねど底意探合ふ、武士町人の汐境、隔てあうたる奥書院、心残して打通る。其間を待ちかねかけ出る大隅、「わしやお怪我が有らうかと、あぶく／＼思うて居たはいな」「イヤモ怪我の代りに氣悪い相人、ほつこりと退屈。是からわつさり廊酒、サアおぢや太夫」と打ちつれて、行く先向ふを閉切る大藏、「貰ひかゝつた其の大隅、一言事ほざくとしめ上ぐる」と、掴みかゝるを身をかはし、「太夫が代りに請取れ」と、以前の太筒取るより早く、どうど投ければ透さぬ

強力、「さ知つたり」と請留むれど、重さに釣られてたゞくく、尻居にどつきり、見やりもせず、手を引き合せて二人連、廓をさして出でて行く。「ヤアにつくい二才め遁さじ」と、駈出す後へ、「ヤレ大藏早まるな」と、聲かけ出づる大友三郎、「彼奴こそ正しく大内義廣、容易には討取りがたく、自滅させんず我計略。是こそ大内が家に傳はる勘合の印」「スリヤ先達て其の寶を」「シイ、高いく」と兩人が、密めく奥は樂器の調べ、笙の音色も牙え渡る、廊下傳ひに光高卿、「路次にて喋し合せし如く、其印だに差上げなば、望に任せ眞柴大内征伐の院宣なるぞ、有りがたく頂戴せよ」「ハア、有りがたしく。此上は久吉でも大内でも、宣旨を所持する某に、背かば朝敵、此上ながら禁廷宜しく光高卿」と、印を渡せば装束の、袖に納むる勅使の底意、善か悪かはしる書院、響く時計も酉の刻、「ヤア大藏、汝は早く濱手へ廻り、勅使の乗船用意せよ」「畏つた」と駈けり行く。折から騒ぐ奥座敷、追取りに出海左衛門、苦り切つたる正清も、勅使の御座と見るよりも、思はず左右に平伏す。光高柔和の御氣色にて、「コハけしからざる二人が顔色、仔細いかに」と有りければ、謹しんで手をつかへ、「兩家の重器を取換へよと、勅命に従はざる久吉が我儘。サア正清、勅使も是に御入りなるぞ。今一言云ふて見よ」「オオ其方の寶も出さず、月日の旗を請取らんと、表裏を以て人を欺くへれ股武士と、言うたが何

と「ヤア表裏とは舌長し、旗を出さずば何時までも、いつかな寶は渡さぬ左衛門」「そりや此方も同然さ。勘合の印落手の上、望みの旗は渡しくれう。併し其印は先達て、陶が反逆露顯の砌、紛失したで有らうがな」「オ、小田春永没落より、行方知れざる月日の旗、久吉是を所持せしとは、偽で有らうがな」「イヤ此方に所持してゐる」「イヤサ勘合の印は大内の重器、紛失せし覺はない」「しかと有るかよ」「おんでもない事」「見るぞよ」「見せう」と雙方が、忍びの鯉口切刃の争ひ、「ヤア勅使の御前も憚らぬ水掛論、此上は兩方の、寶と寶を突出して、取換へめされ」と大友が、うはべに作るお爲顔、「よきに」とばかり光高の、仰にはつと二人の勇士、「ヤアヤア者ども、囚人引け」と呼ばれば、承つて兩方より、忍びと見えし黒装束、めいゝ主人が傍近く、引つすゑてこそ控ゐる。「サア宗貞、此曲者覺えあらん。月日の旗を奪はんと、我旅宿へ忍び込みし大内が家來、旗の代に請取るか」「オ、此曲者も義廣公の旅宿へ忍び、勘合の印を奪はんとせし眞柴が家來、助け返すを有りがたいと、旗を渡すかさもなくば、西國武士の手並を見せう」「オ、是非渡さずば、數萬騎の軍勢を以て義廣が、首も寶も請取る正清」「ホ、面白し。取るか遣るかは軍の勝劣、相聲變じて敵同士。一家の因も兩家の和睦も、俱に破斷の敵と敵、軍神への血祭り」と、忍と忍を兩人が、抜く間も稻妻閃めく刀、首は彼處へ落ちてけ

り。斯くと聞くより家中の諸士、「正清歸すな、討取れ」と、矢櫛つくつて取巻けば、「ヤレ待て方々、只一人の敵を恐れ、討取りしと沙汰有つては、大内の武勇鈍きに似たり、皆引かれよ」と大度の詞、智勇に其の名出海は、實に大國の執權なり。正清につこと打笑ひ、「數度の軍場に鍛うたる、加藤が五體は鐵石同然、なまくら刃金の矢先は立たぬ」「ホ、其廣言を左衛門が、留めるは戰場手練の鎗先」「勝負は互の天運次第」と、並みゐる諸士に目もやらず、出行く勇將見送る義者、別れてこそは立歸る。引違へて庭先へ、駈け來る家來が忙たどしく、「勅使下向の折も折、又もや絹笠三位なりと、只今は」と知らする中、早昇きすゆる乗物の、内より出づる其の勿體、堂上ながら丸裸、立ちはだかつて正笏し、「我こそ絹笠三位光高、路次の狼藉、何者がかよる仕業を、武士ども哀めよ」とばかりにて、ふるひ聲なる勅使の趣、耳にもかけず以前の勅使、「眞柴大内が再度の確執、歸洛の上にて奏聞せん」と、座を立ち給へば、「ヤア勅使と成つて入込む曲者、そこ動くな」と詰寄る宗貞、寄らば切らんと眼を配る、頭上にふしぎや數多の白鳩、群をなすこそ怪しけれ。左衛門きつと見、「扱こそく、宇佐八幡の示現によつて、當家に授かる白鳩裂、勘合の印の袋となす、世俗に是を大内裂と、隠れなだかき希代の重器、今目前に顯はす奇瑞、氏神守護有る大内の寶、盜取つて所持する曲者、腕を廻せ」と詰

めかくれば、破れかぶれと三郎が、寶を渡せと組付くを、脇壺ちやうど眞の當、早足に蹴上ぐる疊の下、ひらりと飛込む手練の曲者、四方を圍んで召捕れと、番手を定むる數多の捕人、花壇築山廣庭を、驅り立てくかり立つる。早日も西に入りうみや、船路擁護の嚴島、前は海水漫々として、實日の本に三つの景、眺に飽かぬ風情なり。神すゞしめの神樂歌、きねが鼓や吹きすさぶ、笛の響もしんくと、音も澄み渡る夕暮時、浪間を潜り舌先より、現れ出づる勅使の曲者、寶を口に引つくはへ、蓬の白髪四方へ亂し、さも物凄き老女の姿、心を配りあたりを眺め、「年來望みし勘合の印、是さへ有れば軍勢催促は心の儘、其上加藤出海ともに、互に疑念を抱くやう、反間を用ひたれば、眞柴大内が軍は治定、其虛を討たば大望成就。エ、忝や嬉しや」と、悦ぶ後に窺ふ捕人、「曲者やらぬ」と突出す長柄、心得たりと身をかはし、前後を拂うて渡り合ひ、多勢を屈せぬ手練の老女、祕術を盡し挑みあふ、激しき太刀風に切立てられ、「こりや叶はぬ」と大勢は、一度にばつと逃けちつたり。猶も心を配る内、さまよひ出づる以前の娘、「コレ姫君、狼狽へる所でない。浦手へ廻れば合圖の笠船、サア早うく」とせつかれても、心はそぞろ氣はうろく、「サア教への所へ行かうと思つても、跡へ心が引かされて、エエつとまう、どうぞも一度さつきのお方に」「エ、何をくどく。生捕られては家の恥、早う

早うに是非なくも、躓けつ轉びつ落ちて行く。續いて歩む後より、「曲者捕つた」と取付く捕人、海へばつさり切込んで、跡しら浪と失せにけり。始終の様子廻廊の、蔭に聞き居る怪しの宮奴、老女が跡を打ながめ、「今のは慥に、ムウ」と、胸に納むる折こそ有れ、何處よりかはばらばらと、諸侯のめんく立出でて、「久吉公の御迎ひ」と、供奉嚴重に、備はる智仁いうくと、寛仁大度の御粧ひ、前後左右は綺羅星の、輝く威勢高富氏、旅館をさして三重歸らるよ。

三冊目

唄せうならく、喧嘩をせうなら弱い奴がよいはさ。ぞめく小唄も嘘八百、鐵砲組の悪者ども、火蓋の三に二つ玉、大道一ぱい肩肘を、張込くはすいがみ頬、直に渡らね錦帶橋、養賣店に腰打ちかけ、「すつほん屋、夕べのは水臭うて喰はれなんだ」「オ、火蓋がいふ通り、水臭ういけなんだ。今度は随分すり込み、二膳持つて來られい」「ハイ水くさうて悪くば、いつそこ煎にせう」と釜の下、炭が無いやら煮えかぬる。火吹竹やら杓子やら、取違へたるあわて者、二人は御機嫌、「味さうな、早うく」と近飢ゑ、出来るや否や取食ひ、「是で算用しられい」と、投出したるはした錢、亭主は取上げ不承々々、「此間のも一所にして壹貫八百、是では七百八

十足りませぬ」「オ、足らずば、何ほ有らうと皆借り」と、あつい火蓋が頬の皮、見附けたそ
 ぶりこなたの煮賣屋、寄らず障らずあゆみ寄り、すれ違うたる身鹽梅、煮賣屋聲かけ、「これ
 これ」「おれが事か」「こなさんの事でごんす」「何でありや」「大儀ながら、あの錦帶橋の橋詰
 へ出て下はれい」「サア橋詰へ来たが何でありや」「イヤ外の事でもない。跡の月の晦日の晩に、
 遣らうと云はんした蛸の代、サア今貰はうかい」「エ、何を吐かずい、借つた物をついに拂
 うた事はない。おこせとぬかしや此通り」と、頭びつしやり只喰はれ、算用合はぬそろばん橋、
 出入はこづけた煮賣屋ども、「こりやたまらぬ」と逃けて行く。「コリヤ二つ玉、皆遁けをつた
 間に、何にも角も喰うてこまさうかい」「オ、知れた事、こりや天からの お當てがひ、うまい
 うまい」と二人ども、そこら探して鍋の蓋、取なりしやんと振袖の、袂に餘る色盛り、裾もほ
 らほら歩み來る、お圓を見るより跡先から、「コレ姉さん、何處へ行かんす、送るかえ」「オ、
 此二つ玉も連になるかえ」と、釣りかけて見る戀の羈。「オ、滅相な、私はつい其處な氏神様
 へ」「オット其氏神込んでゐる、大かた色事の願である。神様を頼まいでも、得心してゐるお
 れはどうぢやえ」「コレアノ火蓋が厭ならおれになと、私が心が届いたら、すぐにお前を連れ
 ていぬ。返事はどう」と兩方から、無理に引つばる其所へ、來かゝる清介走り寄り、二人を取

つて突き退くれば、「ヤア清介かよい所へ」と、悦ぶおゑんは地獄にて、佛に逢ひし心なり。「コリヤ二才め、何で邪魔擴ぐ」「イヤ邪魔は致しませぬが、この娘御をどう成されます」「ハテどうというたら惚れたに因つて、ナア二つ玉」「オ、二人して本得心にたんのうさすのぢや」「ハテ夫は滅相といふもの、惚れたと思うたら、あつちからも惚れる様にするが色事でござります」「ム、成程さうでは有らうがナウ火蓋、おいらはついど女の方から」「亶サアそこが秘密魂膽、何でも惚れささうと思へば、女の好へ持つて行くが色事の穴、此娘御はきつい身振や踊が」「火「オット皆まで言ふな込んでゐるは。コリヤ二つ玉、娘の好くは雷子や巴江の、板子出島はさて色所、客は立派に氣はさつぱ、腰ざし紋羽に中よしの、洒落た顔してよしなさい、夕べも來よとて騙はたの」踊に性根有頂天、二人も此場をだまはたの、透を窺ひ逃けて行く。踊りしまうて其處らを見て、「コリヤとうくおれを騙はたの、憎いやつ」と、咥く折から懷手、のつさのつさと出で來る、種が島大藏、大道に立ちほだかり、「最前より此所へ、大友殿は見えなんだか」と、尋ぬる向ふへ大友三郎、家來引連れ歩みくる。夫と見るより大藏は、土に手をつき敬へば、三郎はあたりを見廻し、「先達で申し付けた、其方が家に傳はる火藥の祕書、いよく明日」「ハテ御念に及ばぬ。勘當しられても子に違ひのない私、片意地いうても親は女の事、つい

取つて参りますが、褒美には違ひなう大名に」「オ、サ望みさへ叶へば、二ヶ國が三ヶ國でもく
れるはさ」「オットうまいは。何と火蓋も二ツ玉もあれ聞いたか」火「イヤまういつそえらぢや。
時にこなんが大名に成らんすと、男作の拵へがむつかしい。マア下駄は蒔繪に頭巾は縫と行か
ずば成るまい」「オ、それ火蓋のいふ通り、禪は虎の皮がよからうかい。ノウ頭」「イヤ申し
三郎様、萬事は明日此方より」「然らば手筈の違はぬ様、上の關の野はづれに、家來を待たせ
返事を相待つ、必ず首尾よく。大藏さらば」種「おさらば」と、欲惡二つ兩方へ、引別れてぞ急
ぎ行く。歸る道筋氣もせきやう、おゑんが跡に清助が、息急き歩む向ふの方、のさばり出づる
二人の惡者、見るよりおゑん清助も、俱に驚くばかりなり。「ヤイ二才め、ようやりあがつた
な。大方この道と思うた故、頭にちやら食はして跡へ戻つたは、さつきの禮を」と兩方より、
一度に掛るを身をかはし、左右へどつさり投げられても、直に取付く我武者者、おゑんが氣轉
煮賣屋の、茶釜を取つて火蓋が頭、手桶をさんぶり二つ玉、うろ付く二人その隙に、おゑんが
手を取り清助は、跡をも見ずして三重遁け歸る。

四冊目

其比は絶えて無かりし鐵砲鍛冶、井上何某が後家娘、夫の譲り受繼いで、世渡る業も上の關、店は諸方の注文に、砥いだり磨く鐵砲に、手も放されぬ忙しさ。汗をたらく下職角兵衛、「アアしんどや〜、煙草もせずと大方にやり付けたぞ」「オ、おいらも腰がめり〜いふ、イヤモなんほめりついても、お圓様の顔さへ見ると、とんとしんどい事はない。夫にあの子の名をおゑんとはきつい間違ひ、いつでも顔見るとおへるのにナア」「ア、又惡口ばかり、唄さんが聞いてぢやぞえ」と、顔は赤らむ紅葉ばの、うつらふ色ぞ見まほしき。暖簾押上げ母おきは、「イヤコレ皆の衆、けふの仕業は急ぎ物、まう出来あがりましたかの」「ハイ〜磨きは出来ましてござります」「それなら仕立はいつもの通り、裏の細工場」「ハイ〜そんなら左様」と銘銘に、鐵砲抱かへ立つて行く。おゑんは母が傍に寄り、「此間から軍が起ると、此の周防の國は大騒動、夫につけても便少ない女の身の上、かてゝ加へた事ながら、斯ういふ折を幸に、勘當なされた兄様を」「ア、又兄が事かいなう。親の譲りの職を嫌ひ、鐵砲組の、イヤ種が島のと、異名を付けての男達、あれが人間の所作かいなう。思ひ出すも面目ない、此後は兄が事、ぶつたり言うてもたもるなや。ほんに夫はさうと、此の清助は御城下までいきやつたが、連は戻りと母娘、見やる表へ立歸る、此家の下人清助とて、色もくつきり白島に、女の惚れる當世男、

清助は畏り、「ハイ今日の注文は此通りでござります」と、さし出す書付手にとる母、娘は夫と嬉し^{うれ}さも、飛立つ心を目で知らず、母の手前ぞしんきなる。「秋月の屋敷が貳百挺、菊地が三百挺、こりや鐵砲ばかりぢやの」「ハイ其外に種が島廿挺、是も同じ屋敷の御注文。イヤ申し夫はさうと、上方勢が國境まで攻入つたと、九州の地はきつい騒動でござります」「イヤもう何ほ騒動しても、氣遣ひのない此の離島、あつちは軍、こつちは金設けの盛、あまりの遽しさにほつとりと草臥れた、どりや此透に一寢入。そなたも休みや」と母親が、立つは娘の勝手口、暖簾の内へ入りにけり。おゑんは跡を打詠め、「テモマアきつい粹な唄さん、二人を残して置かしやんしたは、譯有る中を知つての事か、いつそ様子を打明けて」「ア、コレ申し、それ言うたらわたしはおめあし」「何のマア母様に限つて、そんな心は無いはいの。私には聲を取ると云はんした事も有り、其様に言やるのは、わがみは厭かや」「ハテめつさうな、何で私が」「いやでは無いかえ、オ、嬉し。そんなら斯う」と手を取つて、戀におほこは媚めきて、抱き合うたる其折から、勘當の息子種が島大藏、大小いかつに差しこはらし、仲間の惡者供に連れ、案内も無くすつと入る。内には恂り飛びのく二人。「ア、コリヤく廻ける事はない、兄は粹ぢやく。そして母ぢやは内にか」「アイ唄様は奥にぢやが、兄さんおまへの其の形はえ」「是か、えいの

すりで有らうがな、けふよりはお侍のちやきく、夫に付いて母ぢやに急用、逢ひに來たのぢや。母ぢや人く」と、家内に響く乙調聲、もれ聞えてや母は立出で、「ついに見た事もないお侍、何の御用」と外さぬ顔。「エ、また片意地かい。けふ來たは無心ではない、コレそつちの爲には大豊年、其譯はまあ斯うぢや、きのふ大友様へ抱へられ、れつきとしたお侍、仲間の火蓋や二つ玉もあの通りで。家來共」「ナイくく」と畏る。「何とえらいか、斯う出世するに付いては、母ぢやや妹を、喰ふや喰はずの職人では置かれまいと、終にない慈悲の心が起つて來た故、こつちから了簡付けて、勘當赦されに來てやつたのぢや。ナアさうでないか」「さうともく。破れ世帶を取置いて、後室様よ奥様と、言はれて出世をなさるといふもの。ナア火ぶたよ」「オ、テヤ。勘當請けた母親の面倒を見てやるとは、近年の大孝行、綿屋其處退けでござります」「母ぢや人聞いてか、あの通りぢや。有りがたいか、本得心か、エ、嬉しさうな顔付ぢや」と、口から出次第取りじめも、成らず者とは知られけり。母はあわてゝ高笑ひ、「ホ、ア、おとましや、此のお侍は氣違ひさうな、笑止な事」と顔背け、相人にならねば娘のおゑん、「夫は餘りお氣強い、侍に成つたと有るからは、是までの心でも有るまい、どうぞ是から」「アアコレそりや何を云やる。親の譲りの職を嫌ひ、外を家とする不孝者、勘當したれば他人と他

人、すべて武士は武士の道、町人は町人と、其業に疎い者は人間の廢り物、天も覆はず、地も是を載せずとやらん、今でも職人に成る心なら、勘當赦すまい物でもない。道に背いた侍、顔見るも淺まし穢らはし」と、誠を攻めし母親の、異見を聞くに清助が、我身に徹へ骨に沁み、不孝を悔む忍び泣。大藏は大あくび、「エ、そんなしゆんだ事聞きには來ぬはい。勘當赦さねばそつちの損、コレけふ爰へ來たは、火藥の祕書が欲しいばかり、サア出して貰はう、出して下あれい」「イヤそんな物は持つては居ぬぞ」「エ、隠さんすな、親父から傳はつた地雷の法、知りぬいてゐる此大藏、主人大友の懇望、首尾よういたら大名に成る代物、出世の種ぢや、出したく。出さねばいつそ手短に、家捜しする」と、二人に目くばせ身構へし、奥を目かけて駈入る氣相、驚く二人騒がぬおきは、「コレ職人衆、さつきに云付けて置いた通り、早うく」といふ聲に、裏よりてん手に下職共、鐵砲引提け走り出で、筒先揃へて取巻いたり。女と思ひ侮つて、奥へと有ればお好みの鐵砲組、念を入れての二つ玉「ムア、コレめつさうな。いかに商賣柄ぢやとて、斯う澤山に鐵砲を、もて扱うてよい物か。ナア火蓋よ、二つ玉よ」「ム、誰ぞ逝くまいといふにござれ、おいらもとうから逝きたうて、尻がもぢく氣ももぢく」「ホ、、、重ねてから足切込むと何時でも此通り。コレ皆の衆、後へ戻れば面倒な、どうで往ぬ道野はづ

れまで、送つてやつて下されい」職「ハイ／＼左様ならわたしらは、直にお暇申します」「オ
オ大儀でござつた。あしたの仕事も急ぎ物、随分早うに」「ハイ／＼畏りました。サア息子
殿歩ましやれ」大「エ、けつたいな行はれ」「サア／＼／＼」と付け廻され、我身にあたる鐵砲
組、むしやくしや腹の立場さへ、つぶやきてこそ出でて行く。跡はひとつそと大水の、出でし
譬や濁り江の、水によるべのつぎぼさへ、挨拶すまぬ二人が心、見て取る母は思案を極め、
「コレ二人共こゝへおちや。清助、そなたはあのおゑんと不義イヤサ云交して居やらうがの」
「エ、」「ハテ呵るではない、譯有る中を幸に、聲に成つて貰ひたい」大「エ、スリヤ不義の
お呵りもなう」大「ハテ女夫にして下さんすかえ」「オ、互に好きあふ若いとし、得心有れば
夫婦の盃、押付業も清助を、由ある武士の胤と見た故、縁を結んだ其上で頼みたい事、コレ
頼まれて下され」と、様子有りけな詞のはし、退引ならず言ひかけられ、「コレハ／＼、御推
量の上は包むに及ばず、成程わたくし武士の果、様子によつて頼まれませうが、シテ其子細
は」「嬉しうござる忝い、兄は元より妹にも、是まで包みし氏系圖、夫は井上新左衛門とて、
大内島の冠者の家臣、南蠻の傳を以て、始めて鐵砲を作り主人へ献上、隣國の大友より鐵砲
を頻りの懇望、與へざるを憤り、不意に押寄せ夫の最期、其後爰にかくれ住み、子供を養

育時節を待ち、夫の仇を報はんと思へども、兄は不所存者、一人はかよわき女の事、頼みといふは敵の血筋大友三郎、上方勢の先驅して、古主大内と戦ふ最中、こなたを古主へ味方させ、大友を討ち夫の恨、晴させて貰ひたさ、聲に望むもこの入譯、得心して下さるか」「アイヤ其儀は」「不得心か」「サア夫は」「サアくくく」の詞詰、返答何とせいすけが、望有る身の當惑に、暫し詞も無き折から、表に數多の供廻、前後を圍ふ鈺乗物、門口に昇居ゆれば、近習の侍手をつかへ、「井上氏の貴宅は是かな、案内申す」と音なふ聲、とめ木の音もしとやかに、云はねど夫と高家の奥方、乗物出づる襠姿、思はず見やる清助が、「ヤア姉上か」と、云はんとせしが、身を顧みて控ゆる體、見向きもやらすしづくと、母が手を取り上座に直し、押下れば此方はもちく。「イヤ申し見ぐるしき埴生へ、何御用かはしらねども、慇懃なおあしらひ、サ、ひらに是へ」と立上る。「ア、イヤ左様におつしやる者でなし、私事は加藤虎之助正清が奥、葉末と申す者、又あれにゐる清助事は、自が眞實の弟、其儀に付き密々にお頼み申す子細有つて、はるく是まで参りし」と聞いて忸り、「エ、そんならあなたは久吉方、正清様の奥様か」と、親子が驚き戀聲の、素姓も嘸と鞆るとばかり、娘は追あどなくも、「テモ結構な姉御様、ようこそお出」と茶を汲むやら、槌ではかの追從に、二人が戀は見えにけ

り。「是はマア、思ひがけない清助が身の上、其又姉御がお頼とはな」「アイヤ餘の儀でもなく弟が身の上、親の不興にしはしの國遠、其の後行方を尋ねしに、此家に奉公いたす由、聞く早速参りしは、弟を連れ歸り、親の勘當赦させたく、何卒只今お暇を」と、云ひならべたる詞の先折、「申し葉末様とやら、其事ならば成りませぬ。と申す譯はアノ清助、下人では無い娘が嫁がね、夫に隙は遣られませぬ」「ムウさうおつしやれば角が立つ、たとへ弟が契約せうが、此姉が不得心、約束變改女房を、去つて戻るも男のかうけ」「エ、」「ア、コレ娘御、心強と思やらうが、連歸らねば埋木と、朽果つる弟が不便さ」「イヤそりやあなたの勝手ばつかり、たとへ娘が縁は切れても、清助は年の中、證文の有る其中は、極めの奉公勤めさす。大名の御威光でも、國の掟は背かれまい。何とく」と理の當然、返す詞もなよ竹の、葉末は夫と心得て、家來を招き、用意は何か白臺を、おきはが前にとり直させ、「些少ながら此の金子は、清助が奉公の、年を償ふ三百兩」「イヤ尙以て成りませぬ、職人と侮つて、金銀をもつての押付業、お大名には似合はぬさもししい仕方、相手になる隙がない、とつと持つてお歸り」と、突出す白臺山吹色、落花狼藉あらけなく、納戸の内へ入る跡は、どう納るかしら臺を、取直さする姉が氣に、いづれと分けて身にかよる、血筋の難儀とやかくと、思ひつどけて立上り、見

廻すこなたの種が島、取上げて打眺め、「稀なる武器の最上なれども、内に魂なき時は、火薬のしるしも能なき鐵砲、ム、元の武士に立歸るか、此家で朽果てるか、的はそなたの心の火蓋、切つて歸るか歸らぬか、工夫をしや」と弟へ、姉が心の口薬、残して奥へ入る跡は、恩と義理との二つ玉、はたと我身に行當る、思案の體におゐるは摺寄り、「ナウおまへは姉御様の詞に付き、往ぬる心でござんすかえ。コレイナア俯いてばかり居て、物いはしやんせぬは女夫に成るはいやかいな。アほんに思へば恥しい、此家へ見えた其日より、目元の張のきつとして、立居物ごし爪はづれ、由ある人と思ひそめ、二世も三世も變らじと、契りし事も皆いたづら、あの奥様が姉御なら、あなたは知れた御大名、惚れたといふも勿體ない。譬へていはど高根の花、賤しい此身と諦めても、思ひ切られぬ戀路の因果、おまへに別れ片時も、生きてはるぬ」と取付いて、恨も道の一筋な、娘心ぞいぢらしき。清助は默然と、暫し詞も無かりしが、「オ、是まで段々そなたの深切、禮は詞に盡されず、さりながら此の入譯、とつくりと聞いてたも。姉にもせよ、女の推舉に勘當を赦されては、某が武士道立たず、又留れば親への不孝、闇に迷ふ此身の上、然るに幸久吉公、當國出馬の先陣に加はり、高名手柄をあらはして、元の武士に返りし上、表向に助太刀して、大友を討取れば、母の頼みも立つ道理、夫を功

に勘當の、詫せんものと思へども、今落ちぶれし素肌武者、武具も無ければ叶はぬ望、武運に盡きし身の覺悟、武士にもあらず町人の、死恥とも成らぬやう、今姉上が賜はりし、此種が島が我身のとどめ。オ、とはいふ物の由緒有る、武士の忤がやみくと、犬死するが口惜しい、おゑんさらば」と立上る、裾にすがつて、「コレくく、武具調へる金が有る」「何と」「サア姉御様が母様へ、申上げたら調へども、夫ではおまへの心が立つまい、外にわたしが心當、コレ早まつて下さんすな」と、當なき詞も身に換へて、夫思ひの眞實は、不便にも又いぢらしよ。「ム、ウ武具調へる金は百兩、誠とは思はねども、暫しの猶豫はそなたへ禮、暮六つまでに合點か」「アイ、命にかへても拵へます。とはいへ日脚も七つ過、一時たらぬ其内に、もしも出來ずば暮六つの、鐘を合圖に鐵砲腹、コレ短氣を出して下さんすなえ」「此筒音が互の別れ」さらばとばかり見かはす目に、雨か涕の種が島、火繩も濕るやれ障子、開けて一間へ入りにける。跡におゑんはうつとりと、胸は幾瀬の物思ひ、「暮六つまでに請合うたが、百兩と云ふ金が、どうして出來るあだてもなし、一寸遁れもお前の命が延したさ、嘘もやつぱりいとしさ故、命で金を買へるなら、縦へ此身をすたくくに、刻まれても金が欲しい。夫の命が助けたい。アレくアレ、段々日脚も傾く空、こりやまあどうせうく」と、立つたり居たり狂氣の如く、泣入り

絶入りゐたりける。「オ、其金おれが借してやろ」と、ぬつと出て来る納戸口、「ヤアおまへは兄さん」「コリヤ聲が高い。裏口より忍び込み、様子を聞けば手詰の難儀、金借してやる其の代り、火薬の祕書を盗んでこい」「エ、」「エ、とはいらいぬか」「サア夫は」「いやか」「サア」「サア、サアくどうぢや」と難題も、いやと云はれぬ暮六つ前、「ムウなるほど盗んで上げませうが、其詞に違ひは無いかえ」「ハテ知れた事、人の見ぬ内早うく」「アイくくく慥に有所は鎮守の内、勿體ない事ながら、夫の命にやかへられぬ。オ、さうぢやく」と帶引きしめ、夫思ひの一心に、神も赦して給はれと、かよわき足を踏みしめく歩み寄り、念なう鋭前捻ちちぎり、扇明くればこは如何に、祕書にはあらで火薬の丸がせ、兄は見るより、「ムウコリヤ炮烙火の仕掛玉、是が有つても祕書がなければよくには立たぬ。どうしても祕書は母ぢやめが懐、いつそ奥へ」と駈行くを、止むるおゑん、「エ、邪魔ひろがすとそこ放せ」と、争ふ折しも撞出す暮六つ、「ヤアくくくあの鐘は暮六つ、夫の生死」と、見やる一間に煙立ち、どうと響きし鐵砲に、おゑんは思はず倒れ伏し、わつとばかりに伏沈み、正體なみだばかりなり。思ひ定めて起上り、「アノ鐵砲は夫の最期、私も俱に」といふより早く、兄が指添取る間なく、咽にがはと突き立つれば、兄は驚き、「コリヤおゑんよ、早まつた事してくれたな」と、悔めばおゑんは

顔ふり上げ、「イ、エイナ、わたしが自害は覺悟の前、可愛い夫を先立てゝ、何の生きて居られうぞ。わたしが死ぬれば子と言うては、お前一人の事なれば、その惡道な心を入れかへ、是からどうぞ唄さんへ、孝行頼み上げます」と、言ふも苦しき息つかひ、兄は涙の聲を上げ、「オオコリヤ妹よ、おれはとうから善人に成つて居るはいやい。最前祕書を奪はんと、忍びて聞けば大友は、父の敵としらずして、一旦主人と頼めども、恩を請けねば義理もなし。今日よりは亡父が名を繼ぎ、井上新左衛門と改め、舊主に仕ゆる我が本心、母に語つて望の祕書、申請けんと思へども、一應では渡されまじと、心に思はぬ偽りも、主人へ盡す忠義ぞ」と、惡にも強き種が島、大善心の勇士なり。「オ、出かした、其の心を聞いたる母が悦び」と、いふに驚き立ちかゝり、納戸の障子押開けば、手下の火蓋を突留めて、其身も手負の母おきは、「コレコレ大藏、最前の惡者共、裏口より忍び込み、此の如く手をおはせ、祕書を奪取立退きし」と、聞くよりも氣は動轉、「それ取られては一大事、いでほつ付いて取返さん」と、急にせいて駈出せば、此方の一間に聲高く、「ヤアく大内二代の忠臣、種が島を改名せし井上新左衛門元晴に、小坂部和三郎見参せん」と呼はりて、立出づる清助が、姿貌も引きかへて、甲冑に身を固め、鐵砲引提げ欣然と、葉末諸共居ならべば、新左衛門不審顔、「切腹と思ひの外汝が其

形、スリヤ最前の鐵砲は」「ホ、夫こそは汝が母に手を負はせ、祕書を奪取り逃行く曲者、討留めたりし鐵砲を、我最期ぞと思ひつめ、不便のおゑんが有様」と、見やれば葉末も涙にくれ、「いとしの人の身の果や」と悔れば手負は息をつぎ、「御最期と思ひ詰め、早まつたわたしが自害、あなたが此世にござるなら、冥途の道を歩み兼、迷ふはいな」と聲をあけ、歎けば母は這寄つて、「オ、道理ぢやく、是が迷はでなろかいなう。死んだと思ふ其人は、此世に残つてゐるもの、何と冥途へ行かれうぞ。エ、思へば此母が淺手が結句恨めしい」「イ、エせめては母様の、お命恙ないのが嬉しい」「何のなう、死ぬる程なる深手なら、迷はぬやうに諸共に、三途の川を手を引いて、渡らうものを可愛や」と、老の悔みの數々に、親子が涙紅の、血汐あやなすばかりなり。哀れをよそに新左衛門、涙拂うて突つ立ち上り、「ヤア久吉方の小坂部信郷、眼前敵を置きながら、此儘にては歸られまい。いざ來い勝負」と犇めけば、少ホ、いふにや及ぶ、縁は内證、敵と敵、某が手練の程受けて見よ」と、いふより早くはつしと打てば、しつかと受留め手練の井上、小坂部重ねて、「夫こそは火藥の祕書、某が手に入れど、汝へ返すは母への義理、領掌有れ」と、聞くより早く祕書の一巻押開き、讀んでは傾く心の會得、「ホ、、、豫て望みし地雷の法、炮烙火の仕掛まで、委細に記せし此一巻、我手に入れば一時の大功」悦

び勇むその所へ、あまたの軍卒かけ來り、「ヤア大藏の卑怯者、相圖を違へ主人を背き、大内へ味方の返り忠、遁さぬ遣らぬ」とおつとり卷く。新左衛門うち笑ひ、「ハ、、返り忠とは案外なり、古主に仕へる新左衛門、手柄始め軍の手始め、命寢腐る大友勢、火藥の試み幸」と、以前の丸がせ取出し、かしこへ投ぐれば忽ちに、大地は一面炮烙火、あつと叫んで軍兵ども、皆一同に倒れ伏す。「ハ、ア氣味よし、心地よし、始て知つたる火藥の妙、地雷を以て久吉に、泡吹かせんは手裏に在り。汝が首も其時に、取つて得さす」と軍の廣言、「オ、汝が首は此の小坂部、勝負は互に戰場」と、表を立つる勇者と勇者、娘は今を斷末魔、いたはる母親姉葉末、此家を出づる歸國の道、冥途の旅と戰場と、三つに別ると三惡道、心々に三重出でて行く。

五冊目

岩國に、地名も高き小瀬川筋、天地に響く鯨波、兩陣初度の戦ひも、軍破れて大内勢、思ひくに落集り、「ヤレ兵内無事に有つたか、恠右仰介怪我はないか。ヤレくけふの軍は何と思ふ、國始つて圖の無い負けやう、エ、口惜しい事ではないか」「オ、サ小瀬川を隔て、先手の奴等を打ちすくめ、十分味方の勝で有つたに、何として斯う成つたぞい」「ア、我達は知らないな、

頃日噂の兒島元兵衛、上の瀬を渡し、横鎗に辟易しての此のざまさ。年にも似合はぬ手ひどい智慧な奴では無いか」「イヤ智慧ばかりでない、その鎗先のえらさ、此後兒島と見るならば、必ず用心したがよい」「ナイ埒明かぬ事いふな、御家老仁木武者之介様、長々浪人してござつたれど、御歸參が叶つて、アレ見よ、向ふの陣所にござれば、兒島でも大島でも、出合うたら一摘みだ。併し負嫌ひの仁木様、此儘では往なれまい、勝軍に抜けがけして、追ひくる奴らを一人でも、首を取らずば國の恥」「尤、ぬかるな早急け」と、喧嘩過ぎての防州勢、小瀬山さして引つかへす。仁木が家來岩田左太夫、六十餘りの老人引連れ、陣外遙に歩み出で、あたり見廻し小聲に成り、「拙者は是にて御別れ申す、密事の様子は存ぜねども、彌主人が頼みの一儀を」「ハテお氣づかひなされますな、御領分に住む私、殊にあの大切に存する御方のいはしやる事、何の如才がござりませう」「然らば御苦勞」「おさらば」と、立別れんとする所へ、以前の軍兵どいやどや、土民と見えし角前髪、高手に縛め引立つるを、左太夫見るより詞をかけ、「ヤア軍兵ども、若輩者に繩かけしは、仔細有つてか何事」と、尋ねに皆々出かし顔、「此どえらい軍場の、跡にうろつく前髪め、何でも敵の廻し者に極つた、それゆゑ斯くの仕合」と、口いへば件の繩付、「申しく只今も申す通り、うろんな者ぢやござりませぬ。此國の西島、門

六冊目

周防長門の浦境、名におほ島の西東、爰は西島西方の、南無阿彌陀佛せぶらかす、在所質氣の門戸兵衛、有り難やとも家名せり。佛事仕まうて平僧の、かき込み茶漬端近に、大胡座してぐわッさぐわさ、給仕人は娘のお倉、「在所料理でお口には合ふまいけれど、よう上つて下さりませ」「ムニャくくくく獵師の内と楽しんだに、いけもせぬ精進物で、やうく茶漬七八杯、仕まひの付かぬ腹鹽梅、コレモウ膳取つて下され」と、箸投捨てれば、主は庭に縋ひかけた、繩もしつかり達者作り、「ム、何と云はしやる、扱はこなたは精進嫌ひか」「オ、テヤ、寺にゐる時は、一向一心が据わる故、けんによもない顔して居れど、何に寄らず喰ひたい物は、遁さぬ所できかん坊、ハ、ハ、ハ、併し、コレ親父殿、腥物が一つも無うて、今夜の事はどうさつしやる」「ム、今夜の事とは何の事」「ハテ物覺の悪い、咄して置いた聲の事ぢや」「夫忘れてよい物か、精進日で海山とも商賣は休んだが、其の心當はして置いた」「オットよし、斯ういふ内へ聲入するも、何やらこなたに頼みたいと、望んでくる上々聲、ア、心當と言はしやるので、どうやら咽がこそばう成つた。晩まで待たず其聲を、今から往んで連れてくる。何も

て
手廻し親父殿、料理拵へして置かしやれ、コレ濱焼は古いぞや、たつぷり芥子で刺身がよかる。
吸物ならば西島の鰯汁が名物ぢや」と、獨呑込みぬらくら坊主、出て行く隙を待ちかねて、「申し爺さん、聲を入ると云はしやんすは、誰が聲でござんすえ」「オ、知れた事、我が聲ぢや。尤由有る浪人として、去々年の冬から、こちの内へ來た五郎作、縁でがな聲に取つて、我と女夫にして置いたが、又跡月國元へ、ちよつと返して下されと、出て往たなりに置去同然、是では濟まぬと思ふ内、お坊の世話でこちの聲に、望んで來る上方者、相談しめて何か無しに、けふ連れて來る筈ぢや」と、聞いてはつとは思ひながら、「アノとよさんのわつけも無い、何ほう音信ないとても、漸三月立つや立たず、どうまあ男が持たれる物か、止めにして下さんせ」「イヤイヤ段々と寄る年に、我ばかりでは便がない」「サイナア其便りには夕べから戻つてゐる弟の元次、旅勞で休まして置いたれど、いやといふわたしが無理か、起して來て相談せう」と立上るを、「是は扱、弟めは幼少から侍に成りたがる故、備前の郷士へ所望せられて遣つた忤、しくじつて戻つて來ても、三つに付いた癖は百まで、便りに成るやら成るまいやら」「アレまだやつぱり聞分ない、モウ云出して下さんすな」と、つんと背ける門の口、内の様子はきかん坊、墨の衣も取つてのけ、横すぢかひに麻袴、「來たぞや／＼、花聲を連れて來たが、顔見せぬ内

持參ぢさんの敷金しききん、えらぢやはいなうく。サア／＼皆みなの衆しゆ、すつと内へ頼たのみます、えらぢや／＼大
 事ことぢや」と、わめく間あひだに、人歩じんぶが持込もちこむ千兩箱せんりやうせう、間狭ませはき庭にわにみちのくの、黄金こがね花咲く寶たからの山、
 門戸兵衛もんぷべゐぎよつとし、「是は又どめつさうに持込もちこんだは、此箱ここのせうは皆金みなかねか」「知れた事、えらぢや
 はいなうく、十箱じふせうで丁ちやうど壹萬兩いちまんにやうりやう、愚僧ぐそうも歩ふ一の千兩をせしめたら、還俗けんそくして花やる心、マア
 あたまは跡あとへ廻まはし、麻あさ上下かみしもの仲人役なかうじやく、是がほんまの三國さんごく一、聲こゑに取濟とりすました顔かほで、親父おや隨分奢おごら
 しやれ」と、いきり切つたる坊主天窓はうずあたま、もたへのない年寄質氣としよりかたぎ、「コレお坊、深切しんせつぶりは忝かたじけな
 が、御本山へ上けるやうに、金出かねだしながら悦よろこんで、こんな内へ來る聲こゑなら、コリヤモ何でもろく
 な奴やつぢや有るまい。マアとつくりと糺ただした上」と尻しりへ手の、廻まはり氣きはもつけの幸さいはひ、「ム、とよ
 さんさうぢやはいな、盜人ぬすびとか海賊かいぞくか、跡あとの捌さばけがむづかしい、きり／＼持もつて往いなしやんせ」
 と、何がな往いなしたがる女房にようばう、「エ、譯わけもない、此金ここのかねに尻宮しりみやは、禁中きんちゆう様さまでも來こす事ならぬ。聲こゑが
 わせて名を聞きいたら、恠びつりして目を廻まはさぬ様、氣付きつけの用意よういもして置かしかやれ。ソレ／＼そこへ
 聲殿こゑどのぢや」と、立つたり居ゐたり出でつ入りつ、譯わけしろ妙たへの濱傳はまづたひ、先手さきでの行列ぎやうれつふり込めさ、其勢いきほ
 ひは泰山たいざんの、わきはさみ箱輝はこがやく金紋きんもん、きり鎮しづめたる天あめが下した、持筒もちづつ持弓引馬もちゆみひきうまも、萬里ばんりに羽はうつ大
 鳥毛とりけ、風もなぎなた、枝を鳴らさぬ松まつの木の下蔭したみはえより、今は大樹たいじゆの徳高とくたかき、乗物のりもの出づる大領たいりやう久

吉、名乗らぬ先に氣を吞まれ、親子は鞠れ詞なし。近習小姓は戸外に残し、通り給へばきかん坊、「何と肝がひしやけるか、掣といふは久吉様、冥加に叶うた嫁舅、氣遣ひなしに歩一の外、働き代の御再興、志早うく」と慾頼坊主、「だまらしやれ、御大身の久吉様が、獵師の掣に成りたいとは、外に様子の有りそな事、吞込まぬ縁組は、こつちから變改します。娘も得心せぬからは、連立つて往なしやれ」と、けんもほろよに雉子と鷹、恐れ氣もなきむくつけ親仁、「ホ、ウ利慾に迷はぬ門戸兵衛、推量に違はず、頼入りたき四海の大事、此度當國大内家と、屢合戦利ありといへども、要害堅固の岩國山、本城への間道有るよし、絶所の案内頼まん爲、わざわざ是まで來つたり」「成程其拔道を知つた者は、猪猿の外國中に、今一人と無い此親仁、夫を習うて大内家を、潰してしまふ心である」「イ、ヤ左にあらず、本道より責詰めなば、兩家の死亡少なからず、智計を以て歸服させ、名家を長く立置く心底、必ず疑ふ事なかれ」と、仁慈の仰にお側附、「お受けく」と有りければ、「ム、ハ、ハ、ハ、此國を切取らふと、間に合噓は此親父が、兀あたまに映つて有る。夫ともに、四海の爲と云はしやるが誠なら、物習ふには法の有る物、大將風取り置いて、見事習うて見やしやるか」と、一理窟有る詞のはし、尤や思しけん、「皆の者、心に叶はぬ金子を取持ち、手廻りの外は船中へ」と、遙に遠ざけ久吉公、つか

つかと庭に畏り、「何事によらず教るは師匠、習ふからは弟子分の奉公人、遣うて見て下さりませ」「ハ、夫でちつとは誠にしいが、こつちの内に遣ふからは、米も踏んだり木も割つたり、それ合點なら遣うて見よ」「ア、とよ様めつさうな、あなたは今誰有らう」「ハアテ大事な、あのわるも元成上りぢやはい。小さい時には子傳したり、味噌こし提けて走つたり、下司仕事は苦にも成るまい。幸に縋ひかけて置いた其の繩、目見えにやつてくれぬかい」「何が扱安い事、五十尋や百尋は、つい朝腹」と尻輕に、取つて手品も下司近う、塵に交る薬仕事、坊主は傍に伸び欠び、「ヤレくく、競ひかゝつた敷金は元の鞘、反の合はぬは愚僧一人、せめて一ぱい親仁殿」「オ、コリヤ道理ぢや、娘よ酒屋へ一走り」「アイくく」と立つお倉。「オット待つては蟲がきかん坊、おれが代つて徳利と、道々口からあて呑みに」咽を鳴らして出でて行く。煙管くはへて門戸兵衛、「よつ程下地が有るかして、薬のこなしが味い物ぢや。昔の業をさすに付け、一飛の立身出世、マア何から仕出したぞいの」「さればこそ、因果物語をお尋ね、仕業しながらいかい摘んでお咄し申そ。小姓ども、湯を一つ」ハ、アと用意を白銀の、器に立てる臺子の泌、おつ取つてがぶくく、「のみの息さへ天上すれば、男は氣で食へ、生れ付いて小さい事が大嫌ひ、口から出次第いふ事も、一つ拍子が向いて來ると、我も知らぬ運が手傳ひ、天

が下といふ大身代、持つて見ての其の術なさ、イヤすぢつたはもぢつたはと、訴へて来る度々、
四六五六に分けねばならず。ア、今年は豊年か、凶年か、米が高いは安いまで案じて見るは、
其日過しと同じ身の上、町人が笑へば武家が脹れる、在が好ければ又此方と、思ふ様には成ら
ぬ世界、なうくいやの天下取、按摩取にでも成りたいと、明暮願うてをりました」「いか様
コリヤさうも有らう、そんならやつぱり樂しみは、夕顔棚の下涼か」「ハイ、無うて事足る身こ
そ安けれ、ム、ハ、、、ドレ一服仕らう」心得小姓が、たばこ盆さへ目八分、長い煙管の
上も無き、煙くらべの富士淺間、お倉は始終もぢくと、「氣の輕いお方なれど、仰山なあの
姿」戸「ほんになア、奥へ連立ち張込んで、おれが著換の古布子、著せかへてやつてくれ」久ヤ
ソリヤ有りがたい、久しぶりの洗濯物、お辭儀なしに申し請けう」戸「オ、勝手見がてら休んで
おぢや」久「小姓どもは當家を放れ休息いたせ」「後程お目にかよりましょ」と、上と下との分
隔、そぐはぬ藥屋に長袴の、裾引別れ入り給ふ。跡には一人佛壇の、扉押明けぶつくと、ゆ
ふ時の勤終る頃、お倉は心も心ならず、「申しと様、我を立抜いて久吉様を、留めさしやんし
たお前の心、間道とやらを教へる氣か、但しは外に思案でも有つての事か」と心問へば、「そり
や心底を見届けた上、どうせうと儘な事」「イエく惡うござんせう、御領分に住むお前、殊に

夫の身の上は」「オ、今大内家へ歸參して、仁木武者之介と云はうがな」「エ、それ知りながら拔道を、教へる心でござんすな」「ハテ日本」の久吉殿、下司仕業の奉公も、下を憐む名大將、相人に取るは危もの、こちらの内に留めて置くは、國の爲聲が爲ぢや。ドレ裏へいて大將に、米なりと踏ましてこう」と、提くらべせし煙草盆、脇へ押しやり入る跡を、見送る目さへ涙ぐみたる女氣も、案じに暮れの「かねてより、夫を仁木武者之助と、本名知つてとよさんが今の口ぶり、敵方へ拔道を、教ゆる心はやつぱり慾か、但しは武家に望有る、弟が出世を願うてか、何にもせよ此事を、夫へ告げん」と駈け出せしが、「イヤくくく、知らした上で憎い奴と、たつた一人のとよ様を、國の仕置は知れた事、親の訴人に行くも同然、こちらも大切あちらも大事、兎にも角にも睦じう、して下さるが親の慈悲、中に立つ身の悲しさを、思ひやりなき胸慾」と、親と夫の二道に、迷ふ心ぞいぢらしき。時分を窺ふ弟元次、直に生立つ竹藪を、手頃に切つたる引削鎗、奥を目掛けて寄らんとす。姉は驚き、「コレ弟、勢ひ込んでコリヤどこへ」「シイ音高し姉者人、幼少より武門を望み、上方にて主取せし、亡君明智の敵は久吉、恨を返す此の竹鎗、さすれば大内の國恩も、俱に報ずる今この時、そこ退き給へ」と血氣の若者、「オ、其心を聞く上は、女ながらも夫の名代、國に仇する眞柴大領、餘しはせじ」と、かひなくしくも身

拵へ、「急くまい姊人」倉心得し」と、忍び寄つたる一間の内、人影目當に突込む竹鎗、切取る手ごたへ「仕損ぜし」と、蹴放す障子の内には爺親、思ひがけなき兄弟は、誤り入つて跡じさり、親は惚れく何氣なう、「漸く夕べ戻つた弟、海山かけての獵師商賣、知らずに居ては口が干上る、其繩爰へ持つてこい。マア山の案内から、教へて置かう」と差圖して、「ソレく姊が持つた繩の端、東の尾崎を入込んで、さう、斯う西へ引廻した、二間ばかりが十四五町、見上げる様な石のかはり、ソレ横槌を上置き、其石を左へ取り、樹木茂つた谷間を十丁ばかり、此縁側へ上る様な、切岸高い岩山を、木の根にすがつて攀ぢ登れば、敷居の流れ小瀬川の上を渡つて又爰に、數百間に餘る大岩、煙草盆、印に付けし枝折を尋ね、右へ廻つて高山を、上りつ下りつ、凡道法貳百丁、岩國の本城へ、急げく」と云ひければ、「スリヤ御教は山口の間道とな」「オ、兩人彌猛にはやるとも、いかなく討たれぬ大將、今教へた間道より、武者之助を手引して、久吉が首討たさう爲、事にかこつけ留置いたも、聶に手柄がさせたいばかり、今宵の中に」と、持つたる一腰投げ出せば、元次ははつと押戴き、「コハ有難き御本心、是こそ主人に受けたる感狀、我身の姓名成行まで、一書に詳しく認め置く、事急なれば」と、取出す一封取り次ぐ姊、「難所の夜道怪我せぬ様」心得用意の陣松明、道を照して駈けり行く。親もぞ

くぞく後影、「我子ながらも、生れ勝つたりよいやつ、此感狀に姓名とは、何と名を付けをつた」と、親子は行燈引寄せて、「國を出づる時は、親兄弟を忘るゝにはあらねども、弓矢の義理は私ならず。ハテむづかしう書置いたなア。明智の殘黨と申すは偽、誠は養父の古主に隨ひ、久吉公の下知によつて、間道を聞取らば、是を功に大内家と和睦の願ひ、國に仇して國を助け、不孝に似て孝を立つる和睦の神文、慥に御落手下され度候。親人様へ、兒島元兵衛政次」と、讀む度々に親子が驚き、戸「ヤア／＼扱は頃日名に高き、兒島元兵衛といふ若者は、忤元次で有つたよな。ア久しぶりて戻りやつたは、間道を習はう爲か」「とよ様」「娘」ハアはつと軋れてどうと坐し、しばし詞も無き折から、始終見届け久吉公、欣然と立出で給ひ、「仁木に縁有る門戸兵衛、一應では教へぬ間道、聞取る方便は兒島が誠心、感じ得させし其神文、間道より攻入つて、勝利は得るとも大内家の、本領相違有るべからず。案内知るれば直さま出陣、知らせの相圖」と狼煙の一煙、待設けたる諸軍勢、早御迎ひと満々たり。門戸兵衛は答へもなく、以前切つたる竹鎗の、穂先を腹に突立つれば、取付く娘が氣も半亂、「頼みに思つた弟は、義理故隔たる敵味方、死ぬるお氣なら後れはせぬ、早まつた事なされた」と、歎き沈めば息ぐるしく、「古今無雙の名將を、山かせぎの猿智恵で、計らんとせし身の天罰、國の破れを引出した、極惡人

の成敗は、此竹鎗のお仕置に、かゝる因果の罪亡し、大將の御情には、國の相續其の次手に、不忠不孝な悴めを、行先頼み上げます」と、恩愛餘る親心。久吉殆ど感じ給ひ、「卑賤に惜しき親子が心底、實武者之助が妻舅、兒島が親にて有りけるよ。跡氣遣はず成佛せよ、さらばく」と愁涙を、袖に拂うて出で給ふ。諸軍も隊伍嚴かに、問道さして急ぎ行く。泣入る娘も是までと、覺悟の刃止むる父、「イヤく放して下さんせ」と、あせる此方の苦船より、「舅の命捨てられし故、今こそ死地に陥る久吉、適妙計成就せり」と、云ひつゝひらりと縁側へ、上るは仁木武者之助、凜々たる勇氣の骨柄、「ヤアお前はこちの人、是はく」と二度悔り、手負は傍に這ひ寄つて、「聲に取つた始より、只人ならぬ浪人と、思ふに違はぬこなたの素姓、きのふ陣所で名のり合ひ、教へを守りし今宵の手段、そつちの用意はいかに犢殿」「ハ、ア御氣遣ひ下さるな、海手を廻る問道を、反つて山路へおびき入れ、地雷を以て塵、希代の勝利は瞬く内。去るにても親仁様、其身ばかりか肉身の、我子を見殺す御心底、嘸や便なく思されん。此家へ忍んで猿冠者を、討取るは易けれども、卑怯未練に身を隠し、欺し討ちしと云はれんは、大家に仕へる武名の恥辱、是よりほつ付き戦場にて、眞柴が頭を得ん事は、國の洪福舅の賜、ハ、ハ、ハ嬉しく悦ばしや」と、勇立つたる猛將の、聞えは末世に隠れなし。表へすたくきかん

坊、勢ひ込んで駈來り、「ヤア〜親仁殿、檀家の頼みに大將を、とつくりやつて山道へ、村境から勢揃へ、えいさつさつとたつた今、往たを見付けた穴賢。モウよい時分仁木様、早うお出かけなされませ。しかしかはいや大勢が、皆一時に焼殺され、朝には紅顔有つて追付け白骨のみぞ残れる、歸命無量術ない山坂へ、汗を流して引つかへす。仁木は開くる喜悅の眉、雲間をきつと打眺め、「我國の火精を以て、東に列る敵の木曜、一炬の焦土と成さんず計畧、水生木と北方より、助くる水氣は味方の凶事、ハテ怪しや」と伸上る。岩國山に雲覆ひ、忽ち降りくる雨の足、雷光隙なく鳴る神の、響き渡つて悽まじし。孝郷怒りの齒がみをなし、「思ひ寄りなき此天變、謀は人に在り、功を成すべき天運は、久吉に及ばぬよな、無念々々」と降る雨に、争ふ涙はら〜、妻もうろ〜門戸兵衛、「悴を殺し身を捨てよ、計りしも皆空事、何とせう」倉どうせう」と、騒ぐ二人を押ししづめ、「此上は無二無三、久吉が首取るか、叶はぬ時は切つて切死、舅殿。女房さらば」と、ゆう者の別れ、一振ふつたる鎗の柄に、風を切つてぞ駈出でたり。親子はハア〜心も空に、雨か涙の幾しきり、すはや合戦半と見え、螺の音太鼓人馬の聲、倉アノ大勢に只一騎、いかゞして防ぎ給はん」戸「聲はいかに」「夫は何」と、早討死の時刻かと、見やる渚も吹く風に、逆浪打込む藁屋の軒、内も生死の沙境、「夫の先がけ

とよ様の、未來のお供」と、懷劍咽に貫けば、「娘出かした、潔よう死んでくれ。仁義を守る久吉の、此神文に違はぬ様、跡に残すが國の爲」と、探る手先に以前の竹、先に挟んで縁側の、柱にしつかとくより付け、よろめきながら親と子が、往様來様の通ひ路も、満ち干る汐の寄せ返る、浮身の終り、「なむあみだ佛、く」今ぞ引きとる波打際、俱に落入る荒海の、哀ばかりぞ残りける。磯打つ波の眞砂地を、踏立て蹴立て武者之助、駈戻つたる阿修羅の勢ひ、「舅殿、女房共、親父様」と、呼べど答へも「縁先に、滴る血汐は二人とも、此海底に沈みしよな。残りし一書は久吉が、和睦を誓ふ自筆の神文、奇怪至極」と引裂き捨て、「縦横無盡に尋ねれども、討ち洩したる大領久吉、我も海手の間道より、一先退き時節を待ち、眞柴が首取り手向けん」と、心に誓うて立つたる所へ、櫓を押切つて上方勢、士卒に交はるきかん坊、船端に大音上げ、「ヤアうつそりの武者之助、我を誠の同宿と、思ふはそちの當の土、佐々木盛政が家來、粕谷の藤治、有りがたやから取入つて、そちの工みはへこ蛸坊主、手並を見よ」と下知する矢櫓、「ヤア舌長なるうす蟲めら、此世の暇くれんす」と、袖先に手をかけ周處が勇、「打ち返したる大灘に、藻屑と成つて塵、フ、、、ハ、、、」少しは心晴れ渡る、月は西島苦洩る船へ、乗移つたる其跡の、血汐に名残有りあけの、嵐に連れて漕ぐ船の、末しら浪路を窺

ひ寄る、英智の大將隨ふ兒島、「仁木が船の行先こそ、誠の間道ござんなれ。アレは届けよ兒島元兵衛」ハツと手早に小具足を、身輕に脱捨て飛込む水術、浮きつ沈んつ 三重慕ひ行く。

七冊目

神と君、直なる御代に周防の國、一の宮の鳥居先、参り下向をまつ蔭に、茶店半分片店は、時代世話事讀分講釋、榮來丹次と墨ぐろに、張紙べつたり聞人ども、毎日押しも分られず、一席仕まひ休息の、間もわやくや、甲「ナウいづれも、扱今の前講は、聞事ではござらぬか」乙「ソレイこちとらも張良が謀に習うて、節季々々掛乞どもが取巻く時、笙の代に輕業の、ちやるめらでおだてかけたら、九里山とあちらこちら、陽氣に成つて逝におろかい」甲「こいつはよいはいの、ヤ其謀で思ひ出した、此國の殿様大内様と、久吉殿との大いくさ、先度も岩國山ですつての事、眞柴殿は焼討に逢はれる所、俄に大雨が降つて來て、討ち洩したけなの」乙「サアさうぢやといの、夫から兩方軍も止めて、睨み合うてゐるばかり、殊に町人百姓にはお構ひなく、随分金儲けして賑はしうせいとのお觸ぢや。そこでおれが思ひ付、近年は何でも角力の番附にする事がはやるによつて、軍の勝負附くと賣りあるいたら錢になろかい。兎角下々を憫れま

しやる殿様、神も納受なされたやら、あれ見やしやれ、時でもないに、神木の櫻の盛り、見事ぢやないか」と我一の、咄し半へ講師の丹治、席へ直つて聲づくろひ、「扱唐軍ばかりもあまり珍らしうござらぬから、後席は此間より、當世眞世話噺講釋を仕ります。則ち昨日は團七九郎兵衛一寸徳兵衛、攝州住吉霞松原にて口論の一件、つひに片袖を取りかはし、兄弟の約を成しまするは、カノ桃園にて義を結びし、玄徳關羽が心に同じ。右九郎兵衛が舅三河屋義平次を切殺し、既に召捕らるべかりし所、一寸三分などが厚情によりまして、備中玉島へ下りまするまででございます。又其頃浪花の市中をあぶれありく、五人男といふ者あり、所謂袖ふり男達となり、其首領を鷹金文七と申し、身の丈七尺、面皮清らかに致して力飽くまで強く、従ふ手下正九郎、たけ拔群にして、眼は照れる星の如く、一聲雲に轟くが故に、世舉つて雷の正九郎と號けたり。其外あんの平兵衛布袋なんど、いづれも一騎當千にして、無雙の豪傑、武士町人の分ちなく、投倒し踏飛し、あたかも群れたる羊の中を、猛虎の蹶けるに異ならず、四角八面にあぶれ廻る。理なるかな此鷹金文七、宅間流の奥義を極め、智謀軍術たくましく、賤しき紺屋の倅なれども、後に宇治の常悦と變名仕り、夫より大明の味方となり、千里が竹に分け入つて、酒呑童子を亡すは、又明日」と出次第に、云ひ廻したる口拍子、聞人も軋れて、「こりや氣疎

い「千里が竹の林より、太郎の話の聞人ども、笑うて歸れば榮來丹次、霞簀の陰へ立つて入る。折から先手の家來ども、「片寄りませい片よれ」と、道を拂はせ井上新左衛門元晴、折目高なる上下衣服、二腰さすが國取の、家臣と見えし其の勿體、來かゝる向ふへ年ばへも、廿の上は六つ七つ、出海左衛門が妻の眞弓、神に願ひを掛けまくも、忍び詣の下向道、夫と見るより、「ヤ是はく宗定殿の御内室、暫くはお物遠」「あなた様にも御息もじ」「成程々々、此間の合戦より、敵も味方も軍を止めて日を送るは、扱々退屈、氣晴しがてらの御代參、心もせければお別れ申す」と、挨拶そこゝ行かんとする、袂を控へて、「まづ暫く、申すまではなけれども、此度の曠軍、譜代外様はいふに及ばず、末々の者までも、命をお主に抛つ戰場、夫左衛門只ひとり、軍評議の席へも召されず、出勤無用と御前の仰は、意趣有る人の讒か、神の力に曇りなき、身の云譯も立つやうと、日毎々々の歩詣、あなたのお目に掛るも御利生、お上へよしなのお取なし、偏に願ひ上げます」と、餘儀なき詞に新左衛門、「ナニ家來ども、社參の様子神主方へ早く案内」と下部を遠ざけ、あたりに咲きたる山櫻の、枝を手折つて傍に寄り、「拙者が返答此通り」と、さし出す一枝打眺め、「時ならず咲く此花を、御返事とおつしやるは」「ホ、ウ當春宮島千疊敷において、正清を見遁し歸すは、妻女の縁に繋がれて、親しき一家の出海左衛門、

返り忠も有らんかと、疑かゝる返り咲。又一つの頼みは、其元の父小坂部兵部義廣公、豫ての懇望、味方に歸伏致されなば、自然と晴れる主人の疑念、汚名を雪ぐ花となるや、歸り咲の不忠不義と後指さるよや、善惡二つは一つの返答、とくと工夫を致されよ」と、花によそへし井上は、實朋友の信なり。聞くに眞弓は胸迫り、とかう辭も無かりしが、思案極めて、「オ、さうぢや、命に懸けて父上を味方に勤め、二心なき夫の忠義を顯はさば」「ホ、ウ御前の首尾は元晴が、刀にかけて麓略はなし。必ず吉左右相待ち申す」「おさらば」「さらば」と目禮式禮、夫思ひの一筋道、操に心張り詰めし、眞弓は別れ立歸る。時分よし簀の茶店より、出づる丹次が合圖の呼子、笛の音に寄る鹿ならで、こゝかしこより一時に、現れ出でたる數多の力者、「井上遁すな討取れ」と、追取り圍めば、「ヤア何やつなれば此狼藉、すされやツ」ときめ付くる。「ヤアどこへく、榮來丹次と假名して、此國へ入込みし某こそ、大友家の勇者と呼ばれし瀬戸坂兵藏、主人を一ぱい啜らした、鐵砲鍛冶屋の俄武士、覺悟ひろけ」と罵つたり。元晴かんなハ、からと打笑ひ、「軍乏しく事がなと、相手ほしきどうぶくら、しをらしき拔斷呼はり、成らば手柄に仕留めて見よ」と、股立きりよと肩衣勿退け、大手を擴けて突つ立つたり。「ヤアにつくい廣言、ソレ者共」「まつかせ」一度に組付くを、取つては投げのけ人礫、折に神樂の笛

鼓、音に紛れて目ざましき、勇力無雙の働きに、腰骨肩骨いたやの霰、ばらくばつと迸け散つたり。「ホ、ホ、ホ、神慮を恐れ難人原、助けて返すが放生會、味方の武運長久を、猶も祈りの太祝詞、義心岩戸を押開く、神の勇力加つて、時におほちの勝鬨と、勇んでこそは 三重詣でける。

八冊目

老いぬれば、麒麟も驚馬と身退き、我領國に引籠る、小坂部兵部晋近、眞柴大内の戦ひで、寄らず障らぬ老將の、胸の器も廣書院、案内と俱に入り來たる。大友三郎景澄、斯くと知らせに、館の主兵部晋近、家に杖つく岩疊作り、刀引提け出で向ひ、互に挨拶事終り、「今隣國大内を責討たんと、眞柴久吉大軍を催し合戦最中、簇下の大友何用有つて、入來なるや」と不審顔、「成程貴所にも存じのごとく、某始め列國の諸將、久吉の幕下に從ふも時の權威、武勇自慢の大内さへ、攻付くる勢ひなれど、足下の武名に恐れてや、手指しもせざるは適家柄、殊に長壽の賀を祝し寸志の品、早くく」の詞の中、家來が運ぶ白臺に、巻絹黃金美酒佳肴、お髻の塵とる琥珀の硯、珊瑚の杖突鬚斗包、廣縁狹しと並ぶれば、「ム、眞柴久吉冠者義廣、二虎戦はしめ、一虎は亡び、一虎は勞るゝ虚を討たんと、賄賂の麥飯を以て、蓮葉の我を釣らんと

は愚々」と取り合はぬ、詞に三郎膝すり寄せ、「弓矢取つては西國に、人も手を置く小坂部殿、わづか當城の主と成し置くは残念至極、拙者に力を添へられなば、眞柴大内も討亡し、六十餘州を手中に握らば、九州一圓四國を添へ、進上申す」と宛もなき、雲を便の空頼、聞きも敢へず打笑ひ、「ハ、ハ、ハ、甲に似せて穴を掘る蟹侍とは貴殿の事、我鋒先にて切取つたる一國一城、恩に被るべき主も無ければ、刃向ふべき敵もなし。足る事を知つて此城に、世を我儘の隠居親仁、國郡望みにおり無い、由なき音物穢はし」と、齒に衣被せぬ老人の、詞にべ無く言放せば、短慮の三郎ぐつと詰めかけ、「ヤア一大事を口外させ、否ならよいはで濟まさうか、胸を定めて返答せよ」と、切刃廻せど見遣りもせず、餘所に吹きなす煙草の煙、さわがぬ丈夫に氣を吞まれ、怖氣立てども負けぬ顔、「かほど言うても相人に成らぬは、エ扱は某が武勇に恐れしものならん。老人相人も大人氣なし、頼聞かすば此進物、持歸るに云分有るまい。留めて見ぬか」と足早に、犬の迹吠家來ども、頬眞赤に枝珊瑚珠、琥珀の塵灰付きほ無う、しよけに成つてぞ立歸る。跡に兵部は眉を皺め、「鹿を指して馬といひし、馬鹿の上行く三郎景澄、數代續きし大友家も、斷絶なさん笑止や」と、仁なる悔きくの間の、襖押明け正清が、妻の葉末に引添ひし、眞弓といへど弦も無き、胸は眞紅に結びたる、文箱携へめいゝに、父の兵部

が右左、願ひ有りけに座に著けば、「ホウ兩家雌雄を爭ふ時節、事繁き中姉妹共、打揃うて來りしは、我賀を祝せん爲ならん。思はざる合戦より、葉末が夫加藤正清、眞弓が嫁したる左衛門宗貞、賀と賀とは敵と敵、去りながら武士の常珍しからず。シテ孫どもは堅固で居るか」と、尋ねに姉は會釋して、「賀の悦びを幸に、参りし様子は久吉様へ、何とぞお味方有る様と、是までお勧め申せども、お聞入れない父上様、御勘當遊ばした弟の和三郎、今では眞柴の御譜代同然、賀も娘も子も孫も、一家一門睦じう、同じ味方に有るならば、モウ此様なお目出たい嬉しい事はない。昔氣質を取置いて、朝日と昇る大將へ、お味方なされ弟が、勘當赦すといひ一口、いうて給はれ父上」と、我身の上と弟が、詫も一つに取交ぜし、姉が願ひを打消す妹、「オ、身勝手な姉様、私が來たのも同じ願ひ、大内の家の兩家老、武者之助が出海かと、言はるゝ勇士も眞柴の家臣、正清に縁有りと、義廣様のお疑、軍のお供も叶はぬ悔しさ。父上さへお味方あらば、夫の明りも立つ道理、孫子不便と思すなら、大内方へのお味方を、偏に願ひ上げます」と、いふも涙に曇り聲、追の父も姉妹が、同じ願ひに默然と、答なければ猶すり寄り、「御返答なされぬは姉様に附くお心か、若しお聞届けない時は、此箱の封を切り、改め見いと夫の云付」「ソリヤ姉も同じ事、お返事の品に寄り、此箱を父上に、見せて心を定めよと、様子有りけな

夫の指圖、御思案願ひ上げます」と、同じく傍に差置けば、「ム、眞柴大内兩家より、是まで再三招くといへども、所存有つて従はぬ、我に見せよと兩人の、聲と聲とが送りし此箱、とくと思慮して否應の返答、それまでは預り置く、萬事は後程先づ奥へ」と、納むる父も一思案、夫思ひの姉妹が、上べに笑顔つくれども、胸は蝸牛の角隠す、心々を三方へ、引別れてぞ入りにける。秋は殊更物さびし、千草にすだく蟲ならで、臺子の釜の音澄みて、數寄屋待合前栽の、露路と勝手を忍び足、隔て合うたる姉妹が、心も先へ飛石づたひ、それと眞弓が「姉さんが」「オ、爰へは何しに、エ聞えた、わしを出し抜き父上を、大内方へ味方に付けうと思やるのか」「さう言はしやんすお前こそ、先へ廻つて久吉方へ、勧める心でござんせう」「エ、つべこべと口答、そこ退きやらぬか」と突きのけて、行くも姉甲斐隔つる眞弓、邪魔仕やんなと振りほどく、風に屏風の柳腰、帶際取つて引戻す、腕もかよわき糸薄、亂す黒髪兩方が、掴み合うたる姉妹喧嘩、争ふはずみ縁側へ、こける拍子にぱつたりと、思はず開く障子の内、閑を樂む音近が、臺子にがより獨服の、濃茶の手前他念なく、「出海加藤が妻と言はるゝ身を以て、はしたなき振舞、さりながら、主家を思ふの貞節、さのみは阿らぬ、中直は幸々、姉妹中も濃茶の盃、サ爰へく」と機嫌よき、父の詞に葉末差寄り、「今四海一統に、久吉様へ従ふ時節、理を非に曲けてお味方を」

「イエ、姉様まんがちな。申し父上、義廣様へお味方せうと、つい言うて下さんせ」「ハテ姦しい、是非返答が聞きたくば、雙方共罷りならぬ。此上はそち達が、持參の品を改めよ」と、取出し渡す以前の箱、心濟まねどめいくが、あたふた明けて取出す、様子は何かしら布に、「ムウけふの細布胸合はずと、古歌の下句、手跡は夫正清殿」「わたしが方はコレ此扇、ドレ、秋來月を視て歸思多し、自ら籠を開いて白鷗を放つ。ム、コリヤコレ古郷を思ふ詩の心」「娘共、とくと工夫を仕れ」アイとはいへどおとどひが、夫の心しら布と、かけし扇の判じ物、解けぬ色目を見て取る音近、「眞柴が招きに従はざる、舅も舅も心々、けふの細布胸合はずと、一家の縁も此ごとく、斷切る布は離縁の印」「エ、そんならわたしは正清殿に」「オ、そちばかりでない妹も、古郷を慕ふ詩を、扇面に書し送りし左衛門、要をはづせし其扇、親骨子骨ばらくに、因を切つたる扇の去狀」ハアはつとばかりに詞なく、目には涙の玉手箱、明けてくやしき思ひなり。時しも次より近習の武士、「眞柴家より使者として加藤正清、大内より使者として出海左衛門宗貞、只今是へ」と知らすれば、萎れし葉末も露持つ心地、「オ、よい所へ夫の使者、子中なした夫婦間、合點もさせず去られた様子を」「オ、さうでござんすとも、わたしとても同じ事、お使者で有らうが此恨、頼むは姉様」「呑込んだ」と、初めのもつれ何所へやら、ほどけ合うては引締め

る、帶も眞身のおとどひ思ひ、「ヤア縁切つたれば他人向、無禮の挨拶仕るな。身も禮服に改めん」と、いひつゝ立つて奥深く、入る間に程も長廊下、「加藤虎之助正清」と、親の名を假る笹市が、まだ十才の腕白盛、年も相生ふ松太郎、「父左衛門」と是も亦、名は芳しき柎檀の、みばえゆゑしく打通れば、思ひがけなき母と母、「ヤア左衛門殿と思うたは松太郎か、ようおぢやつたの」「笹市もとゝ様の御名代ぢやの、長上下の著こなしぶり、よう似合うた事はいの。サアくお使者の口上此母へ」「イエく」とゝ様と縁が切れた、お前は餘所の伯母様ぢや」「オ、笹市殿の云はしやる通り、コレ餘所の伯母様、祖父様へのお取次、お頼申し上げます」と、云合さねど兩方が、利發に困る母親も、何と答へも口ごもる。一間にかくと洩れ聞く兵部、老の氣丈の長袴、左右に小太刀携へて、作法亂さず歩み出で、「久しく對面せざる中、ハテ大人しく生育ちしな。娘が縁に引かれざる、小坂部が性根を知り、縁を切つて孫共を、使者に差越す發明々々。がもし此祖父が承引せずば、其儘では歸られまい、とくと思案を定めよ」と、詞も待たず松太郎、「此役目仕おほせねば、生きて屋敷へ戻るなと、とゝ様のお詞」と、云ひつゝ手早に上下上著、脱けば白無垢麻上下、母は見るより、「オ、さう無うてはならぬ筈、大人も及ばぬ健氣さを、眞似が成るならどなたでも、仕て見やしやんせ」と聞けがしの、詞も耳に當り障り、「コレ妹、親の口から

子を褒めるは聞きにくい、それ程の事仕かねる様な笹市では無いはいの」「アイ祖父様が味方に付いてくだされずば、死ぬる覺悟に極めてゐます」「オ、さうで有ろく、早う用意」と上下の、紐を解くやらほどくやら、上著脱がせば同じくも、下は無紋の死出立、見るよりはつとは思ひながら、「オ、出かしやつたなう、眞實極めたそなたの覺悟、誰も口では立派にいへど、まさかに成ると臆病風、出やすい物」と初の嵐、吹き戻されて「コレ姉さん、臆病風とは誰が事、儀に依つては命を惜む松太郎ぢやござんせぬ」「ソリヤこちの子も同じ事、父上のお返事次第、立派な覺悟見物しや」「イヤ松太郎が覺悟を見せう」「見事そなたが」「お前が」と、我子眞眞に取りのがし、詞しどろに争へば、「ヤア無益の論談、左程離縁が悲しくば、切れたる縁を繼合す工夫はさまぐ、さりながらわれ達は此座に叶はぬ、早く立て。うじくと立ちかねるは、父が詞を用ゐぬか」と、老のいら立是非もなく、出づる心のしをり門、親子の中も隔つる切戸、鏢かけて、「申し祖父様、久吉方へお味方有らば、わしや侍が立ちませぬ」「オ、武士が立たうが立つまいが、祖父様はこつちの味方」「イヤさうは成るまい」「して見せう」「オ、出かすく、適勇者の忤ども、しかし大内に付けば笹市が恥辱とならん、と有つて眞柴に従はど、松太郎が身の上、いづれを捨ていづれを取らん、彼獅子の子を試すに等しく、此場に置いて兩人が、眞

劍けんの勝負しょうぶを試み、勝つたる方へ祖父が味方、心覺えの此の二腰、是を以て立合へ」と、渡せば取つてめいゝが、腰にさすがは武士の、こ太刀の目釘くひ濡し、股立りとしく身拵へ、戸の透間より差覗く、母と母とは在られぬ思ひ、「年端もいかぬ二人の子供、命にかゝる眞劍の、勝負さすとは餘りな、むごいはいの」とかきくどく、親の思ひぞ遣る瀬なき。耳にも懸けず音近は、床に直せし鼓取上げ、「我壯年の頃、武將足利義晴公、數度の軍功御賞美有り、尙も武名を鳴せよと、劔と號けし此鼓を下し賜はり、年賀毎に打つが吉例、今六十の賀を祝す、謠終らぬ其中に、用意よくば」と打鳴す、鼓のしらべ、白刃の刃、拔放して立向ふ、互の懸聲鼓の矢聲。「謠有りがたや、治る御代の習ひとて、山河草木穩かに、五日の風や十日の、あめが下照る日の光」劍の光打合ふ刃音、見る目ひやいさあぶなさに、こらへかねて駆け入るを、何時の間にかは物陰に、忍び姿の宗貞加藤、制し留むれば詮方も、泣けど叫べど白破を、一足去す切結ぶ、武士の扇の直焼刃、付入る刀請けはづし、弓手の肩先松太郎、切込まれてたぢくく。母は見るより悲しさの、心あせれど詮方なみだ、「謠さも潔き山の井の水、山の井の水、山の井の」手紙も屈せぬ松太郎、尖き刃先笹市が、高股四五寸切付くれば、「アレ笹市が切られたはいの、ソレくく油斷仕やんな」ア、あぶない、必ず負けてたもんな」と、あせりながらも親々が、

詞の助太刀牛角の手練、切ツつ切られつ逆る、血汐染めなす秋草も、色を争ふ修羅の場、勝負いづれと氣を配る、父と父とは千萬無量、母は外面に血の涙、祖父は早むる謠の責、「謠君は船、君は船、臣は水、水よく船を浮べく、て、臣よく君を仰ぐ御代とて、返すくもよき御代なれや、く、萬歳の道に歸りなんく」深手に弱る松太郎、氣嵩の笹市捲り立て、とどめ刺さんと立寄るを、「ヤレ待て勝負見届けたぞ。娘どもは手負の介抱、早くく」に母と母、我身をしづに東西の、鏝はづれ押明くる、としや遅しと駈け入つて、我子く」に縄付き、「オ、嬉しや笹市、そなたは淺疵、神や佛のお蔭ぞ」と、姉は悦ぶ妹は、手負にひしと抱付き、介抱愚なきさけぶ、「ヤア武士の家に育ちながら未練至極、笹市勝負に切勝つ上は、兵部音近今日より、久吉公へ味方ぞ」と、聞くにいそく、姉葉末、お馬の先の高名にも、まさつた手柄と譽めそやす、餘所の悦び子心に、聞くも無念さ松太郎、「エ、わしや負けたか口惜い、今一勝負」と刀を杖、立上れどもよろくく、見る目に母はたへかねて、「オ、道理ぢやく、道理ぢやはいなう。武士の意地とは云ひながら、孫は子よりも可愛いと、世の諺も有る物を、見殺しにする固意地は、むごいつれない父上」と、恨の數矢かぞへ立て、いふも眞弓が子に迷ふ、悔みにいとど苦しきの、引入る息を張詰めて、「ア、かよさま、祖父様に恨はない、負けたはわたしが未熟

から、大事の役目を仕損じた。憎いやつぢやとと様にな、呵られうかとそれが悲しい。もし尋ねてなら、笹市に負けはせぬ、怪我についに切られたと、言うて詫して下され」と、今は際も名を惜しむ、稚心のいぢらしさ。こたへくし祖父兵部、以前の刀抜くより早く、腹へがはと突立つれば、「ナウ何故の御最期」と、右と左に姉妹、取付き歎けば氣丈の手負、眞弓が顔を打眺めて涙を浮め、「オ、恨は尤さりながら、何をか包まん松太郎へ、最前渡せし一腰はな、刃引も同然なまくら物、さるによつて笹市が手疵は薄手、斯く計らひし一通り、本意ならねと云聞かさん、姉の葉末は先立ちし、我兄元胤が忘れがたみ、某とは生さぬ中、同じ血の緒と云ひながら、義理有る孫の笹市が命を助け、肉身の松太郎を殺せしは、指す敵加藤正清に、縁を引いたる親左衛門、返り忠もあらんかと、主家義廣の疑念を晴すは、骨肉の一子を殺す義者の潔白、此上なしと思ひ寄りしも、義理といふ二字が劔と成つたるかや。月にも花にも換へぬ程、いづれ劣らぬ不便さも、生みの娘が生みの縁、分けて可愛い松太郎、コリヤ空死とばし思ふなよ。年こそ寄つたれ無雙の勇者、小坂部兵部音近を、そちが刀で此の如く、小腕に仕留め潔く、討死せし手柄者、出かしをつたと爺親が、賞めこそすれ呵りはせまい、心残さず臨終を」と、義理の孫子と恩愛に、捨つる命の有りがたさ。姉は元より妹が、「さうとは知らず父上を、恨んだが勿體な

い。コレ松太郎聞きやつたか、そなたが死ぬるは爺御の爲、負けたのぢやない勝ぢやといなう」
「ア、嬉しうござる、そんならお前も縁切らず、元の通りにとゞ様と、中よう添うて下されや。
かゝ様、かゝ様は何所にぢや」「オ、爰に居るく、悲しや其方はまう目が見えぬかいなう」
「アイ、侍の子が未練なと笑はれうか知らねども、死ぬる今はにとゞ様や、お前の顔がたつた
一目、それがく」といふ跡は、舌ももつるゝ斷末魔、「オ、苦しかろせつなかる、其苦痛より此
祖父が、切ツつはツつの度々を、謠鼓で紛らしても、肉骨を裂く苦みは、一百三十六地獄の、
呵責を一度に請くるとも、此上の有るべきか、可愛の孫や」と取亂し、歎けば姉は急き上けく、
「孫子の爲にお命を、捨てゝ恵みの父の恩、船車にも積まれうか。そればかりかはいとし子を、
義理の刃に殺すのが、悲しう無うて何とせう、こらへてたも」と妹に、手を合したる詫涙、「アノ
姉様の勿體ない、斯う成り行くも先の世の、約束事と諦めても、こんなゆゑしい子を殺す、其日
も更へず父上まで、同じ刃の憂き別れ、神も佛も無き世か」と、手を取りかはし姉妹が、返ら
ぬ悔み宗貞も、加藤が手前恥ぢらひて、爰にとだにも得も言はぬ、胸の苦しさ目に餘る、涙見
せずと喰ひしぼる、心を察し正清も、たもちかねたる共涙、眞は泣寄り眞實の、涙々に暮近き、
秋や哀れを添へぬらん。左衛門悲歎の涙を拂ひ、「一子を殺し、一一心なき我誠忠を表はすも、忤

が孝心舅の情、命を給はる返禮は、再び結ぶ聲舅」「ホ、、、正清とてさの如し、大内義廣征伐に、小坂部が討死と記録に残さば、松太郎舅の追福此上なし」と、聞くよりにつこと打ち笑みて、「ハ、仁有り義有り、味方は名のみ相果つる、兵部が末期の置土産、笹市に與へし太刀こそ我重代、北辰の二字を彫りし、武運守護有る七星丸、萬夫不當の正清に、劔の威徳加はりて、和漢に美名を残されよ。此上頼むは末子三郎、小坂部九郎音近と、我が若年の名を繼がせ、厚恩有る久吉公、御子孫の時に至り、スハ御大事と見るならば、粉骨盡し忠義を立てなば、草葉の蔭より悦ぶと、傳へておくりやれ聲殿」と、末期の一句孫娘、「ナウこれ今が別れか」と、歎けど更に其かひも、嵐が告ぐる螺太鼓、遠音に響き物凄し。加藤が郎等木村和田藏、かけ來つて大音聲、「大内が本城山口は、要害堅固の絶所なれば、數日の對陣時を待ち、計り知つたる海手より、足利慶覺西國へ、下向と流布せし六字の旗、武器を隠せし兵船に、押立てく押し渡る、味方は必勝破竹の勢ひ、急ぎ御出馬然るべし」と、申し捨てよぞ引返す。「一大事」と左衛門宗貞、劣らぬ正清雙方が、忍び装束脱捨つれば、肌には小具足身をかため、勢ひ込む軍場の出立、「やおれ正清慥に聞け、久吉樂毅が術をなすとも、味方は臥龍が備へを立て、只一戦に追ひ散らさん。早く歸つて猿冠者が、首を堅固に用心せよ」「シヤ案外なる非禮の過言、山口如き

の破れ城、正清先陣蒙らば、一擲みに拉いでくれん、吠頬かはくな左衛門」と、互の廣言雙方が、詰めより詰めよる勇者と勇者、女房々々は正體も、涙ながらにいたはれど、枯るゝ老木と諸共に、惜しや翠の松太郎、あへなく息は絶えにける。わつと一度に聲立てゝ、妻が歎きに目もやらず、互に睨みあひ聲同士、又も聞ゆる攻太鼓、哀を跡に三つ羽の征矢、射るが如くに兩人は、戦場さして三重出でて行く。

九冊目

「ソレくくくやつとせい、こちの殿さま軍を止めて、軍慮帷幕に廻らす物は、間のおさへの盃ばかり、吸付くお敵に夜軍を、誰も來て見よかしのえ」「オ、出來たく」と大將の、譽める卷舌大隅が、肩に御手を掛綱形、「イヤナニ、こりや軍兵ども、切ツつはツつの軍せうより、色と酒とが浮世の味。ナウ大夫」「サア其御機嫌は嬉しいが、大事の御身を酒びたし、ちつとはおひかへ成されませ」「ハテ異見とは堅いやつの。サ汝等も此盃で一つ呑めく、ソレ」と投げやる大盞を、笠に戴く軍兵ども、「へ、有りがたい大將の御下知背かず、察兵衛芋六、まあ身どもが」と一息に、「呑んでの風は荒けない風だなア」「何だそりや口合が、ドレくく是へ注いで

くれ。風で夜討と定めたり、めたりぬる夜の睦言に、むつ言に目出たうさむらひける。べんべんがべれくくくくく「べんくく」だらりの底拔ども、さいつ押へつ、「ハ、、、、イヤコリヤ面白いは、ま一踊をどろで無いか」「ヤア、さらば爰らで鎧武者の、腑抜け踊が所望ぢやが、合點か」「危い軍は取置いて、好きな酒をば呑み次第、敵の首を討たうより、鎧兜を打殺し、討死せうより呑討ぢや。ソレくくくくく」そこでせい」夢中に成つて踊の最中、苦り切つたる出海左衛門、かけ入る目先の酔ひどれども、投げのけ突きのけ打通れば、一座の興も酔もさめ、底氣味あしく尻込みする、士卒をはつたと睨み付け「追つけ寄せ来る敵を引受け、馬鹿々々しき此の有様、銘々持口大切に、早行けく」と鋭なる、詞に皆々顔見合せ、「扱ても堅い御家老の、折々しかつい御異見に、さつぱり困つた鎧武者」と、あだ口々へ出でて行く。左衛門無念の膝突つかけ、「再度の戦ひ久吉が、武威に碎かれ思はぬ敗北、口惜しながら君を誘ひ、本城山口へ引籠り、軍議評定せんものと、飛歸りしに御陣の有様、酒色に耽り淺ましき御身持、油斷とや申さん、不覺とやせん。サ、、、早く御用意々々々」と、忠義の一途出海が、諷むる詞もしら川に、夜船漕ぎ出す酒機嫌。「ム、熟醉に正體なきは、ホイ、是非なし」と屈託を、我身一つに主思ひ、見聞くにつらき大隅が、「何を言うても此のお姿、後程お目が覺めてから、夫まで

しばし御休息」と、いふ顔眺めて「いか様はや、西施を五湖に沈め、楊貴妃を馬鬼に斬る國の敵はム、成程々々、差扣へる内折入つて、そもじに尋ね問ふべき仔細、暫くあれへ」に何氣なく、「お目が覺めたら呵られうか知らねども、黙止がたない仰、然らばこちへ」と先に立ち、伴ひ別間へ入りにける。折ふし陣門打騒ぎ、「眞柴家よりのお使者なり」と呼れば、大將義廣枕を上げ、「其使待ちかねたり、早く通せ」もめれんの下知、呼び次ぐ内に加藤正清、軍中の姿引きかへて、長上下も優美の骨柄、目禮して上座に著き、「珍らし義廣殿、及ばざる戦ひに、自己の勇威を慢じて拒み、勅命に敵せられしは、滅亡を招くにあらずや。漸く利害に心付き、降参を望まると條相違なきや、相糺せよとの上意なり」と演べければ、義廣廻らぬ舌打して、「ホウ誰かと思へば加藤氏、御苦勞々々々。始めはおのれと我を張つたが、久吉の軍配、簾下の強勇ヤモ厳しい物、叶はぬく。所で降参仕る」と、袴の褶のおれそれも、居すまひ惡しく平伏有る。始終竅ふ出海左衛門、つツと出で、「ヤア舌長なり正清、久吉實に勅を重んじ、忠勤を盡すぞならば、禮儀の使者を越すべきに、人も無けなる今の演舌、大内の家は御先祖より、天子へ背きし事もなく、他國の軍馬を領地に入れず、汝一旦の運に乗じ無禮の一言、我國に聞き用ひる者有るべきか。早く歸つて寄せ來れ」と、筋をあらうけ云ひ放せば、「ム、ハ、、、仁慈を以ての御使者なる

に、恩を仇なる汝が返答、此方より望むにあらず、降参は心次第、併し正清使して、其返答では歸られぬ。主従とくと評定して、命にかけがへ有るならば、勝手々々と大膽不敵、臆めず一間へ打通る。跡打見やり出海は、無念涙をふり拂ひ、「御先祖代々武威を落さね家筋も、かばかり敵に侮られ、降参との思し立、君には天魔が見入りしな、但し御所存有つてか」と、怒り歎いて問ひ詰むれば、義廣は答へもなく、あさりの弓に大雁股、番ふ目當は庭前の、松の下枝かつきと射切つてほやく笑ひ、「左衛門々々々、我心底はアノ一枝」ム、松の木の下久吉を、まつ此の如くの御弓勢、ハアおでかしなされた、夫でこそ我殿」と、悦び勇めば、「ハレヤレ夫は悪い合點、邪魔になる下枝を、取つた木振を見たがよい。久吉へ降参して、免し無ければあの松の、木篇は直に死罪の道具、作りを分ければ公と讀む、公の磔柱といふ事、木に曝されても軍はせぬ氣、長い物には負けいぢや」と、又も手酌に續け香、呆れ果てたる左衛門は、胸にとつくと極むる覺悟、鎧脱ぎ捨て座を占めて、諸肌くつろけ物をも言はず、引抜く短刀腹に突立て、「エ、見下け果てた腰ぬけ殿、さは知らずして肉身の、悴を殺せし忠節も、皆むだ事と成りけるよな。君辱しめらるゝ時は、死をもつてする臣下の道、命を捨てゝ諫める詞、少しは御用ひ下されかし。數代傳はる家國を、敵の馬蹄に穢さん事、口惜しや奇怪や」と、怒りの涙はらくく、

實も大内の兩家老、類稀なる忠臣なり。始終洩れ聞く加藤正清、歩み出で、「遠は出海尤の切腹、義廣の降参は勅命を守る所、別心なき條見届けたり。是こそは宮島にて、衣笠三位と名乗りし賢者、和を計らひし自筆の短冊、何ぞの御用に立つべき品、和睦の印」と手負に渡し、「イデ此通り言上」と、一家の義理をにべもなく、心に残し立歸る。手負は遙かに見送りく、「殿御計略の降参、誠と心得歸りし正清、此上味力の手配りはな」「ホ、、、よくも悟りし左衛門宗定、降参と油斷させ、敵の不意を討たん爲、情弱と見せし我が本心、察せし汝も空腹ならん」「ハツハ、、、主従心一致の上は、本城へ馳せ歸り、諸卒を引連れ逆寄せん。是まで思はぬ敗軍の、お家の寶失せたる故、最前奥にて大隅が、父母の形見と見せたる短冊、ナコレ此守りこそ詮議の緒、加藤が渡せし短冊と、引合して御覽あれ」「オ、豫て知つたる其守、合點行かすと大隅を、留め置きしも心有る、衣笠三位が自筆の短冊、彼が工みと知りながら、武道の意地と久吉に、鋒先を爭ふも、勘合の印紛失故、違勅の咎を受けまいと、天理に任す家の興廢、眞柴を破るは今宵の一舉、ぬかるな左衛門」「合點」と、心の勇みに屈せぬ疵口、腹帶しつかと出海は、山口指してかけり行く。様子立聞く大隅が、走り出るより取纏り、「名をさへ知らぬ父母の、形見の守は何にもせよ、お胎のやとは産月の、けふかあすかと顔見るを、樂しみ

し甲斐もなう、二世の君には疑はれ、何とて生きて居られうぞ」と、覺悟の刀しつかと押へて、「ヤレ待て女、腹な悴がかはゆくば、コレ此の守を添へ、幼少にて別れし親を尋ね求め、我に知らさば變らぬ契り、時節を待て」と手に渡す、守に込めし大將の、さすが情の詞には、こゝろ弱りて泣くばかり。「いで曠軍の用意せん」と、目には別れの一言、ふり捨て奥へ入り給ふ。名残惜しさも女氣に、心引かるゝ小車の、我身につらき憂き思ひ、座を立ちかぬる折こそあれ、柵外響く鯨波、遠見の軍卒馳參じ、「正清和睦を受合ひしも、味方の虚を打つ敵の計略、西島の門戸兵衛か悴、兒島元兵衛政次が案内にて、岩國山の間道より、勢を廻して山口の本城を十重廿重におつとり巻き、出海殿の歸路を立切り、不意を打つて陣外まで、大軍押し寄せ候ふ」と、云捨てよこそ引返す。障子をさつと冠者義廣、怒りの面色髪逆立ち、「謀るゝと思ひしに、眞柴が智謀に陥入りしな。此上は本城の寄手の奴原一拉ぎ、馬引けやツ」と大音聲、心得引出す月毛の駒、ひらりと打乗り丈餘の鐵棒、苦も無く打ち振る四天の勇、「我身も俱にどこまでも、離れはせじ」と大隅が、縋る手綱を振放し、「ヤア戰場へ女を召連れ、我を愚將と誹謗さするか。アレゝゝ寄手も込み入つたり、早立退け」と仰の内、どつと駈け入る上方勢、得たりと鐵棒追取りのべ、五人七人一みしやぎ、怒れて遁け散る先手の勢、駈立て蹴立て馳出

づる、君の御跡おほすみが、危さ怖さ別ちなく、猶も慕うて、三重迷ひ行く。

道行山路の轡蟲

岩たよむ、嶺の嵐も秋暮れて、物騒がしき氣色かな、遙けき山路羊腸たる、嶮岨を凌ぎ義廣は、思はず爰におちこちの、たつ木の蔭も白雲は、別け入る跡を埋むかと、心細さも只一騎、残月に鞭を揚げ、暫しは曇る身なりとも、何時まで斯くは有りなんと、勇む驛路の鈴の音、ふり返り見る陣雲も、やと收まりて靜かなり。義廣馬上に頭を廻らし、「樹間の殺氣は猿冠者が、爰にも兵を伏せつるな。シヤ何程の事あらん」と、獨言して行く先の、茂みに秋の聲ならで、金鐵皆鳴る鎧武者、「落人遣らぬ」と犇めいたり。「ホ、ホ、ホをらしやさしや」と、例の鐵棒振上げて、はつたりちやうくきりぐす、我をまつ蟲鈴蟲も、蹄にかくる轡蟲、露の玉蟲消えぐに、鳴く音残して蠢勢、跡に見捨てゝ行くとなく、心急るゝ岩波の、苔の下行く水の音、難所の渡早瀬川、「ア、此駒よく、如何はせん」とイむ内、何處よりかはしる鳩の、兜の上を二三遍、廻りくゝて谷を越し、飛行くさまを見やり給ひ、正八幡の遣はしめ、鳩の行くへは神明の、導き給ふ浅瀬ぞと、一鞭くれて跳り越え、劉立德が檀溪の、例も斯くと三重いざし

ら菊きくや小萩はぎ原、薄うすの穂ほにも落人おちうじの、跡あとを慕もふや女郎花をみなへし、走著はしりついたる大隅おおくもが、「エ、あの山陰やまかげを廻まはるまで、お姿見すがたみえさせ給たまひしに、いづれへお出でなされたぞ、義廣よみひろ様我君われきみ」と、呼よべど答こたもなく鹿しかの、俱ともに夫戀つまこふ聲こゑばかり。「エ、聞きえませぬ殿様、道みちさへしらぬ山中やまなかに、捨すてられし身のつらさより、お胤たねはいとしう無ないかいなう。思おもひやりなき胸慾むねよくも、印しるしの守父母まもりちちの、守まもりは無なくて筐かたみこそ、仇あだ」と投込なひこむ谷水たにみづの、あはれを告つぐる身の行方さそ、誘さそふ嵐あらしに吹送ふきおくる、遠山松とほやまつの葉は隠かくれに、「義廣よみひろ通のがすな生捕いけじれ」と、君きみを取りまく木の葉武者はむしや、「アレくひあいや只ただお一人、人も梢こずえも紅葉こうじして、空そらに焦こがるゝ我思われおもひ、渡わたる瀬せもなき谷川やがわの、狹せまき流れに程ほどもよく、さしかよりたる古木こぼくの松まつが枝え、二世三世にせさんぜ、縁えんをからみし葛城かつらぎの、糸いとの岩橋いはしなかつ中なか絶たゆる、契くわいりと知らで一筋ひとすぢに、帶おび引きしめて攀よぢ登のぼる、女心いちねんりきの一念力いっぺんりき、懸かれる苦くに踏ふみすべり、足手あしでもさける花はなならで、葛つたの錦にしきをささがにの、いともあやふし三重さんじゆう。

十冊目

山又山さらさら更に幽かすかなる、秋あきの調しらべや琴ことの音ねの、御簾みすの隙ひまも殿造このづくり、梢こずえの錦立田姫にしきたちめ、衣きぬ織おる家うちとも疑うたがはる。風も悲しむ戦場せんじやうより、島の冠者かむり義廣よみひろは、したふ敵てきを追おひ散ちらし、谷川やがわづたひ白鳩しらばとの、跡あとを求め

し此の家の軒、「我を導く白偈の、爰に至りて止まりしは、ハテいぶかしき館の構へ、聞ゆる調は想夫戀、いかなる人の閑居ならん。我も豫ては好ける道」引合より取出す名笛、吹きしめて琴の緒に、和する祕曲は戀々と、斷腸の聲をなし、呂律は風に飄り、谷の水音松の風、心してもや吹きぬらん。内へ洩れしか琴の音も、絶えてひそく婢子女が、「ナウ雁金、人里遠い此山中、變つた音色ぢやないかいの」「オ、名月の云やる通り、狐か但しお姫様の琴の音に浮されて、山の神が來たので有ろ」と、おづく二人は差覗き、「今の笛はあなたかへ。爰へはどうして、ア、紅葉狩の御趣向、惟茂様でも有るまいし、女を鬼と取違へ、必ず聊爾なされな」と、ざれも云寄る詞の品、「ホ、ウ一陣の敗將、少しの勞休めん爲、暫時の宿り御免有れ」と、駒轡ぎ捨て大やうに、しづく通る大名風、二人は頓て押隔て、「ア、顔に似合はぬあつかましい、後室様の留主の内、山の神でも天神でも、内へはならぬ」と支ゆれば、「ナウ暫く」と御簾の間より、留むる蘭奢の一薰り、振の姿もいと清く、月の洩れづる其風情、「女ばかりの山住居、宿こそならずとも、音色やさしき笛竹の、ゆかりは斬しの御休息、いざこなたへ」に女共、「サアお通り」と媚めけば、「心有る琴の調、主の御芳志忝し」と、伴ひ入る顔見合す顔、「ヤアこなたは」「あなたは日外宮島にて」「實も逢見し啞の女中、岩國屋といふ町人姿、

誠は大内、アイヤサ落人となる我身の上、迷ひ來りし山奥に、思ひも寄らぬ閑居のしつらひ、ムウ導く鳩の宿といひ、此家はむざと動かれず」と、座に著き給へば姫は悦び、「ほんにあなたは落人様、軍にお負け遊ばして、たつたお一人、ようまあお負けなされたなア、是程嬉しい事は無い。名月、鴈金、何をうつかり、追付け和子のお歸り時」明「エ、迎ひに行けでござりますかえ、日頃のお噂ナウ鴈金、あなたのをぶり合點かや」無「皆まで言やんな請受つた、山の神様おゆるりと、そこらを宜しう。ナウ申し、お頼み申上けます」と、笑を残して二人連、出づる間を待ちかねて、「お懷しや」と縋り付く。すけなくも振拂ひ、「假初の戯れも、互にかはる此姿、迂闊けな事仕給ひそ」と、咎められては今更に、恥かし振の袖几帳、「姿形は變るとも、名にしおほちの君様と、知らいで仇に戀草の、種蒔き初めてよいものか。焦がれくしけふの今、床しいお顔みち年の、花より稀の逢瀬ぞや、過ぎこし方の契りをも、忘れ給ふは胴慾」と、鎧の袖に縋り寄り、涙の露は緋緘に、朱の玉散る如くなり。「ホ、ウ恨は理さりながら、心得がたき山住の、由緒を聞かねば心の疑念」「スリヤ自が身の上を」「承知の上にて末の契約」「申し上げねば」「契りも是まで假の宿、とくと思案を致されよ。後刻」とばかり云殘し、心をおくに入り給ふ。姫は始終に胸迫り、明けて言はれず明さねば、二世の契も薄紅葉、はかない縁に成

らうかと、かこち涙の折からに、えいさらさらくえいさらく此車、眞紅の綱手引く婢子女が、紅深き上の衣、木々に照添ふ艷姿、錦帳かけし輦の、内より出づる此家の老女、そぐはぬ朱の小打著や、袖に抱きし稚子は、並々ならず見えにける。「オ、皆大儀々々、大事の和子の御痘瘡、紅葉の色は出物の藥、山あけから水もつ、かせ口に成つた婆が嬉しさ、オ、姫君にも嘸お待ちかね。ヤアえいく」と石段を、上るひあいさ心得て、「和子様是へ」と抱取る。姫も涙の色目を隠し、「オ、伯母御前今お歸りか、若の機嫌もよい様子。雁金、最前の品こなたへ」と、仰をきくの一枝は、「此谷川へお留主の中、流れ寄りしを和子様へ、お慰に」と差出せば、「オ、是はく彭祖が保てし八百歳、御壽命目出たき其の一枝。ア、昔の若い折ならば、祝うてばよも舞の一手、ホ、ホ、ホ、有られも無い事言うた、是も少しは菊水の、酒の科ぞと赦し給べ」「イエく常から聞いてをりまする、昔は舞のお上手と、名を取つた後室様、是非に御所望姫君の、琴の調も若様を、祝してちよつと」とほのめけば、「ア、譯もない事云出して、迷惑ながらア、儘よ、若やいだ此姿、必ず跡で笑ふまいぞ、扇かはりは此菊の」枝取持つて立上り、「オウオ和子もにこくをかしい筈よ。唄そも扱も此君は、誰人の子なるぞ、天下一人の花の兒よく、眞柴を除けて、連れておりやろにや上方へ、吉野初瀬の花よりも紅葉よりも、い

としき方は此君の、齡は千代も變らじ」「さても見事お上手」と、口々ほむるを耳にも觸れず、
「ハテ心得ぬ琴の音色、常に變りて殺伐の、調子は此家へなう姫君、妾が留主に何人ぞ、男子
でも参りしか」と、問はれてはつと心の驚き、傍から引取る名月、「ア、イエお留主に來たは
其菊ばかり、花のお蔭で珍らしい、後室様の舞振を、今一度見たい。雁金、秋雨、木の實でも
草花でも、流れてこぬか」と谷川へ、「ま一つこい婆に遣ろ、イヤアノ後室様へ上げます」と、
昔咄しに紛らす氣轉。「オ、何やら流れて來るぞく、是はめでたい松さうな、後室様へ」と
搔き寄せく、「コリヤ何ぢや守袋が掛けて有る、御覽じませ」と差出すを、老母手に取り、
「此裂は花兎、ハテ心得ず」と紐とくく、開けば中に覺えの短冊、「夏の夜の、夢路はかな
き跡の名を、雲井に上げよ山郭公。此歌は夫の辭世わらはが手跡、此谷川へ流れ寄りしは、
ふしぎく」と打守り、いぶかる氣色にいぶかる姫、「聞覚えし其歌の、爰へはどうして奴
ども、なほも流れに氣を付きや」と、さし圖に皆々寄り集ひ、「も一つこい姫様の、お待ち遊
ばす川上に、あれ見や今度は美しい、大きな物が流れてくる。あれよノ」とどよめく内、
宿世の縁か川岸へ、流れ寄りしを見て悔り、「ヤア疵だらけの女の死骸、これはく」と立
騒ぐ。老母もそぞろ氣にかより、「捨身か但し人の所爲か、何にもせよ死骸を岸へ、早うく。

血汐の穢れ若君に、あやかし有つては尙大事、姫君俱に一間へ」と、氣を配る内残りの憾、こはく死骸を引上げたり。老母はおつ立ち疵口より、六脈看相とくと改め、「早事切れし急所の痛手、所詮存命叶はねども、一度蘇生させし上、様子を尋ね見ん物」と、錦の袋取出し、押戴いて死骸の肌へ、納むる寶の奇瑞にや、服せし水を吹出し吹上げ、うんと一聲、「ソリヤこそ」と、秋雨鴈金耳に口、「女中様、女中様いなう」と呼び生くる。無慘やな大隅が、かひなき魂も夫したふ、愛著心に引かれ來て、息吹きかへし目を開き、「殿様々々、我君様」と、死んでも忘れぬ煩惱の、迷ひ／＼て這ひ廻るを、「コレ／＼女中、心を慥に。尋ぬる仔細、此守りに入つたる短冊、持主はこなたか」と、手に持たすれば探り取り、「エ、親の形見の此の短冊、見るに付けても恨めしい、是故にこそ捨てられて、早瀬を渡る蔦かづら、二世の縁まで切れ果てよ、岩に裂かれし身の苦しみ、八寒地獄劔の山、焦れ死ぬるは厭はねど、ま一度逢ひたい義廣様、此身ばかりか腹な子も、十月の今に持孕り、非業に殺すが可愛やなア。皆様のお情には、死んだお胎を切りあばき、身二つにして其跡の、亡骸よきに頼み上げます。萬に一つも生れ子の、お腹で無事に有らうかと、そればつかりが今際の樂しみ、顔見ぬ先に死ぬ母が、心を推量してたべ」と、苦しき中に子を思ふ、親の心の三瀬川、浮む瀬さらに見えざりし。扱

はと老母が胸は板、「守りを添へて別れし娘、宿せし種の初孫も、俱に殺すか不便や」と、目には泉の涌きかへる、心のせつなさ義廣に、縁有る様子名乗りもならず、せめてと千々の思案を定め、「オ、それよ、庭に祭りし此石は、大内家に由縁の名石、先祖の守護神子孫の安産、守りは外に泣入りし、手負を取つて石上へ、假の産家と抱き寄せ、血脈にこほす血の涙、雨と注ぎて清めの手水、猶も寶の靈驗を見せしめ賜へ」と額に當て、心に願ひ掛けまくも、神に祈りの眞實心、名家を助くる御奇特、空にありく白鳩の、仲羽ゆたかに飛廻り、擁護の神力平産の、初聲高く聞えける、末の榮ぞいちじるし。老母は覺えず聲を上げ、「ハ、ア有りがたき寶の奇瑞、傳へ聞く右大將頼朝公の御公達、石上にて平産有る、住吉の誕生石、氏はかはれど男子の出生、吉例目出たき水子の榮え、隠すにも隠されぬ、此ばゝが孫ぢやはいなう」「エ、そんならわたしが」「オ、證據の歌は母が手跡、家來に預け其後の、便に送りし形見の短冊、廻り廻りてけふの今、逢ふと其儘死ぬる娘、安堵の往生させたさに、今まで包みし名乗合、眞實眞身の親子ぢやはいなう」「チエ、忝い我君様、守りの主が知れたはいなア。此事を申上げ、未來の縁が結びたい、母様に問ひたい事、我子は彼所にぞ。モウ目が見えぬ、息有る内に殿様に、逢うて此子が渡したい、逢ひたい見たい」の其人は、爰に有りともし知らぬ火の、餘所に心をつ

くしがた、名のみ残して消ゆる身に、母は取付き、「可愛やなア、望有る身の悲しさは、可愛い娘を三つ四つで、いつを逢瀬の生別れ、今死ぬる期に母が手へ、戻つて來たも因縁かや。長の年月行方さへ、尋ねぬ母を明暮に、さぞや恨んで居たで有る。夫子の名残云ひたい事、岩間に朽ちる秋の草、苔の雫と成つたか」と、取亂しては正體も、涙々に誰々も、歎き數添ふばかりなり。哀れを告ぐる鐘ならで、笏に響く攻太鼓、老女は心つくぐと、傍に聞居る二人の女、何思ひけん目くばせし、奥の間さして駈け入つたり。「ハテ怪しや、此家を取巻く寄鼓、我身の凶事か何にもせよ、姫君々々、春姫様」と、呼ぶ聲共に走出で、「コレく申し、今まで付添ふ三人の女は、久吉方の廻し者、若を奪うてどつちへやら」「ヤアくくく、それは」とばかり氣を逆立ち、かけ出す懷赤子の泣く聲、足手まとひ、「エ、くたばかられて信若君を、奪取られたり口惜しや」と、立つて見居て見無念の齒ざり、猶もかけ行く後の方、「ヤアノ」江州比良が嶽の城主、柴田修理進勝家の後家小谷の方、大内島の冠者義廣逆意の證跡見届けたり」と、立出で給ふをはつたと睨め、「我を小谷と呼びかけて、逆意有りとは何を以て」「ホ、ウ近會宮島にて、絹笠三位と勅を偽り、表は和睦内心は、好みを斷たん汝が姦計、其時加藤へ送りし短冊、柴田が辭世とまがはぬ同筆、其守り故大隅が、不便の最期蘇生して、平産守る寶の奇

瑞、在所は是」と庭に飛びおり、件の大石かるぐと、取つて引きのけ、「土中の印、再び我手に入つたり」と、につこと笑うて立つたる所へ、又も此方の谷陰より、「小田三代の武將信若君、眞柴久吉守護せり」と、抱き参らせ出で給ふ。お供に付添ふ以前の姫、「我々は福島小西が妻女共、此君様のお迎ひに、疾くより入込み奪取つたり。柴田氏の奥もじ様、我慢を止めて日月の、御旗を返し給ひなば、信若君は四海の武將、春姫君は大内家へ、和睦の印お取持、生れしお子はお世継様、三國一の大将の、捌きは斯う」と諫むれば、聞く無念さも遺の老女、思ひ定めてどつかと坐し、「信若君に鹿略なきは、其身の冥加恩には被ぬ、わらはが恨は夫の仇、春永薨じ給ひし後、久吉に心合はざる我夫柴田勝家殿、時にあはづを餘所に見て、比良が嶽に引き籠り、互に争ふ運定め、終に頼みもなつこだち、朽果て賜ひし修羅の妄執晴さんと、我も自害と云ひ觸らし、年月謀りし念願も、今ぞ叶はぬ身の終り、久吉仁義の心あらば、若君姫君兩君の、納りよきに計らへ」と、覺悟の刃を止むる姫、「是まで厚い御介抱、御恩送りは此の水子、我身にかへて養育も、成らう事なら存らへて、教訓頼む伯母御前」と、涙の袖を振放し、「ナウ意地を立つるは武の表、夫へ云譯兩將の、疑ひ晴す自害ぞ」と、突込む刃は段々壞、折れて遙に飛散つたり。「ホ、ウさこそく、日月の旗懷中有れば、其身に劔は立たざる筈、死を止

まつて夫の菩提、君の御先途見遂けるも、天照神の神勅なるぞ。違背有るな」と久吉の、切拂うたる頭の霜、「一句に服する餞別」と、天子の御旗はた竿に、さつと掲けたる月日の光、久吉重ねて大内に向ひ、「互の寶失せし故、云合せずして暫しの確執、小田の正統信若君を守奉れば、今より水魚の交たらん」「ホ、ウ我とても白鳩の、導く靈驗神慮の和平、爰に納まる軍の始末、義廣の明察違はぬ兩家の因」此家をさして「御注進」と呼はり来る雁金は、お傍去らずの會呂利が女房、「御兩家和睦太平と、諸軍も勇む歸陣のお先、塞ぐは仁木武者之助、久吉公に見參と、無體に軍を始むる結構、例の荒者其儘では、敵も味方も内證軍、マアお知らせ」と訴ふる。「ホ、仁木が僥忽の合戦は、互に和睦を知らざる故、義廣向つて制すべし、久吉殿には跡より」と、召馬引寄せゆらりとりの門出せし、其大隅が亡骸を、よきに印の石の下、傾城塚とも末の世に、呼ぶ追善や御祝言、蝶花形は春姫の、興入國入若君を、守護する御武運久吉公、見送る老の一奏。千代に八千代を細石、巖に残る涙の種、姥が窟やもみぢ葉を、踏分けてこそ三重下山ある。

十一冊目

山口の絶所を塞ぎ、久吉の歸路を立切る武者之介、先を爭ふ陣頭に、自ら進む其勢ひ、只烈風の如くにて、群がる中へ割つて入り、縦横無盡に突廻る、尖き槍先當りかね、引色立てと諸軍勢、四方へぱつと逃げ散つたり。かゝる所へ加藤正清かけ來り、「コレ物に狂ふか武者之介、寶の失せしは柴田が後家、小谷の方が爲す所、事明白に分かりし上、眞柴大内の和睦調ひ、目出度き歸國を支ゆるは、いかなる所存と云はせも立てず、「ヤア和睦とは云ひがひなし、たとへ主人は承知有つても、此仁木は不得心、勝負も決せず此儘に退いては、西島にてつがひし詞は反古、一旦合戦と極めし心は金鐵。サアこい勝負」と詰め寄る所へ、大内義廣、出海井上引連れて、後れ駈せにかけ付け給ひ、「ヤア武者之介、久吉公は稀代の名將、小田の正統信若君を守り立てんと有る誠心を感じし故、弓矢の義を捨て和睦の上は、眞柴大内は水魚の因、但し某が詞を背き、譜代相傳の恩を忘れ、此義廣に弓引くか」「サアそれは」サアくくくと理に詰められ、流石の仁木も屈伏したる其折から、小坂部和三郎大友を生捕つて、家來に引かせ出で來り、「寶を盗み讒を構へ、眞柴大内の兩家を亡ぼし、天下を奪はん下工み、殊に新左衛門は俱不戴天の親の仇、討つて本望遂けられよ」と、聞くより井上飛上り、三郎が首討落し、「惡人誅罰せし上は、互に目出たき御歸陣」と、心解けあふ諸軍將、兩家の因萬歳と、野山に滿つる百萬

騎、皆一同に祝しける。

蝶花形名歌島臺終